

# 原 始 仏 教 紹 介

大事にされた子供〈増支部経典 3－38〉  
聖なる求め〈中部経典 26〉

(挿 入) 大サッチャカ経〈中部経典 36 (一部)〉 p8~p15.L16  
悟り 〈ウダーナ 1, 2, 3〉 p15.L18~p16  
最初の説法〈律・大品〉 p22~p25  
無我〈律・大品〉 p26~p28.L35

(付 録) 《六神通》 沙門果経〈長部経典 2〉より

**Namo tassa bhagavato arahato sammā sambuddhassa**

ゝかの尊き師、阿羅漢、正しく覺りを開かれた方に帰依し奉る

## 《大事にされた子供》

比丘達よ、私は大事にされた子供だった。非常に大事にされた子供だった。度を超えて大事にされた子供だった。実に私の父の邸には蓮池が造られてあった。一つは青蓮華の池、一つは紅蓮華の池、一つは白蓮華の池であった。それらはすべて私のために造られたものであった。香はカーシー産（ベナレス産：最高級）以外のものを使うことはなかった。つねに部屋の中をカーシー産の梅檀（白檀）香が満ちていた。またカーシー産以外の衣服を着ることはなかった。カーシー産の下着を着け、カーシー産の衣を着、カーシー産の上着を着けていた。また私の頭上には昼も夜も白い傘蓋がかざされていた。それは私が寒くないように、熱くないように、草や露によって汚されないようにするためであった。

また私には三つの別邸があった。一つは冬季、一つは夏季、一つは雨期に用いるもので、雨期の四ヶ月の間、別邸では女性たちの妓樂の演奏を楽しみながら邸から降りることはなかった。また他家の邸の奴隷や使用人たちは食事には糠にすっぱい粥を混ぜたものが与えられるだけであるが、私の父の邸では炊いたご飯に肉が添えて出されていた。

そのように恵まれ、そのように大事にされた私であったが、あるとき、つぎのように思った。

教えを聞くことがない、多くの人々は自ら老いる存在であり、老いを越えていない。にもかかわらず、他の老いた人を見ては苦々しく思い、恥じ、嫌悪する。自分自身のことを見過ごしておきながら。しかし私もまた老いるものであり、老いを越えていない。わたしもまた、自ら老いる存在であり、老いを越えていない。にもかかわらず、他の老いた人を見て苦々しく思い、恥じ、嫌悪すべきであろうか。いや、それは私にとってふさわしいことではない。比丘達よ、私がこのように考えたとき、私の若さにおける驕りはすべて消え失せた。

教えを聞くことがない、多くの人々は自ら病む存在であり、病いを越えていない。にもかかわらず、他の病んだ人を見ては苦々しく思い、恥じ、嫌悪する。自分自身のことを見過ごしておきながら。しかし私もまた病むものであり、病いを越えていない。わたしもまた、自ら病む存在であり、病いを越えていない。にもかかわらず、他の病んだ人を見て苦々しく思い、恥じ、嫌悪すべきであろうか。いや、それは私にとってふさわしいことではない。比丘達よ、私がこのように考えたとき、私の健康における驕りはすべて消え失せた。

教えを聞くことがない、多くの人々は自ら死ぬ存在であり、死を越えていない。にもかかわらず、他の死んだ人を見ては苦々しく思い、恥じ、嫌悪する。自分自身のことを見過ごしておきながら。しかし私もまた死ぬものであり、死を越えていない。わたしもまた、自ら死ぬ存在であり、死を越えていない。にもかかわらず、他の死んだ人を見て苦々しく思い、恥じ、嫌悪すべきであろうか。いや、それは私にとってふさわしいことではない。比丘達よ、私がこのように考えたとき、私の生における驕りはすべて消え失せた。

比丘達よ、三つの驕りがある。どのような三つであろうか。若さという驕り。健康であるという驕り。生きているという驕りである。

教えを聞くことがない、多くの人々は、若さという驕りによって、身によって悪い行いをなし、言葉によって悪い行いをなし、心によって悪い行いをなす。このような行いをおこなってから、身体が破れたのち、死後の世界におもむき、むごく、ひどく、真っ逆さまに落ちていく地獄に生れる。

教えを聞くことがない、多くの人々は、健康であるという驕りによって、身によって悪い行いをなし、言葉によって悪い行いをなし、心によって悪い行いをなす。このような行いをおこなってから、身体が破れたのち、死後の世界におもむき、むごく、ひどく、真っ逆さまに落ちていく地獄に生れる。

教えを聞くことがない、多くの人々は、生きているという驕りによって、身によって悪い行いをなし、言葉によって悪い行いをなし、心によって悪い行いをなす。このような行いをおこなってから、身体が破れたのち、死後の世界におもむき、むごく、ひどく、真っ逆さまに落ちていく地獄に生れる。

若いという驕りをもった比丘（修行者）は教えに背き、劣った生活に退いていく。健康であるという驕りをもった比丘は教えに背き、劣った生活に退いていく。生きているという驕りをもった比丘は教えに背き、劣った生活に退いていく。

病むこと、老いること、死ぬこと  
あるがままにあるものを、多くの人々はいみ嫌う

私も人々のようにそれらを嫌うべきであろうか？  
それは私にはふさわしいことではない

そのように暮らしていた私は、地上のものではない真理を知って  
若さという驕り、健康であるという驕り、生きているという驕り

それらすべての驕りに打ち勝った。欲のないところに安穩を見て。  
ねはん 涅槃を見た私には、力があつた。

今や私は、欲に仕えることはできない  
けつじょう 清浄行に決 定した私は、もはや退くことのないものとなった

## 《聖なる求め》

(ランマカ・バラモンの庵)

このように私は聞いた。ある時、世尊<sup>せそん</sup>はサーヴァッティー（コーサラ国の首都）のジェータ林にあるアナータピンディカ長者<sup>ちやう</sup>の建てた精舎【寺；修行場所<sup>ぎおんしょうじや</sup>】（祇園精舎）におられた。その時、世尊は早朝に衣をつけ、鉢<sup>はち</sup>と上衣を手にとって、サーヴァッティーの町に托鉢のために出かけられた。

その時、たくさんの比丘<sup>びく</sup>（修行者）達がアーナンダ<sup>あなん</sup>尊者のところに赴きこのように言った。

「アーナンダさま、長い間、世尊の面前での法話がありません。どうか、アーナンダさま、私たちが世尊の面前での法話を聞けるように計らってください。」「それではランマカ・バラモンの庵にいなさい。きっと世尊の面前で法話を聞くことができるでしょう。」「かしこまりました。」と比丘達はアーナンダ尊者に答えた。

世尊はサーヴァッティーの町で托鉢のために歩き回られ、食事を済まされ、托鉢からもどられたとき、アーナンダ尊者に言った。「さあ、アーナンダよ。東園・鹿母講堂（サーヴァッティーの東方にあった精舎）に午後を過ごしに行こう。」

それから世尊は夕方になって、午後の瞑想からもどられたとき、アーナンダ尊者につきのように言われた。「さあ、アーナンダよ。沐浴のためにプッヴァ・コッタカ川に行こう。」「かしこまりました。」とアーナンダ尊者は世尊に答えた。

そこで世尊はアーナンダ尊者を伴ってプッバ・コッタカ川に沐浴のために行かれた。そこで身体を洗われ、川から上がられてから、身体を乾かすために衣一つで立っておられた。

その時、アーナンダ尊者は世尊に言った。「この近くにランマカ・バラモンの庵があります。先生、ランマカ・バラモンの庵は楽しいところです。ランマカ・バラモンの庵は美しいところです。どうか、憐れみを持ってランマカ・バラモンの庵にお立ち寄り下さい」。世尊は沈黙をもって承認された。

(聖なる沈黙)

そこで世尊はランマカ・バラモンの庵に赴かれた。その時、たくさんの比丘達がランマカ・バラモンの庵に、法話に交えるために集まっていた。その時、世尊はドアの前のテラスで話が終わるのを待ちながら立っておられた。話が大体終わったのを知ると、せき払いをしてドアをたたかれた。比丘達は世尊のためにドアを開けた。

世尊はランマカ・バラモンの庵に入られ、設けられた席に着かれた。席に着かれてから比丘達に言われた。「どんな話のために、今、ここに集まっているのかね。どんな話の最中だったのかね。」「世尊についてです。先生。法話の最中だったのです。その時、世尊が入ってこられたのです。」「宜しい。比丘達よ。信仰を持って、家から、家のない状態へと出家した良家の子息であるあなた達にとって、法話のために集まることはふさわしいことである。さて、あなたたちが集まったとき、なすべきことは二つある。一つは法に関する会話であり、一つは聖なる沈黙である。

(聖なる求めと聖ならざる求め)

比丘達よ、ここに二つの「求め」がある。聖なる求めと聖ならざる求めとである。ではなにが聖ならざる求めであるか？ここにあるものたちは自ら生まれる存在でありながら、さらに生まれる存在を追い求める。自ら老いる存在でありながら、さらに老いる存在を追い求める。自ら病む存在でありながら、さらに病む存在を追い求める。自ら死ぬ存在でありながら、さらに死ぬ存在を追い求める。自ら悲しむ存在でありながら、さらに悲しむ存在を追い求める。自ら汚れた存在でありながら、さらに汚れた存在を追い求める。

ではなにが生れ、老い、病み、死に、悲しみ、汚れた存在であるのか。妻と子ども、これがそうである。奴女奴僕、これがそうである。羊、山羊、これがそうである。鶏、豚、これがそうである。象、牛、馬、農耕牛、これがそうである。金、銀、これがそうである。比丘達よ、これらは地上のもの（原語：ウパディ upadhi【原意’そこに置かれた’】、漢訳：穢汚法）である。ここで、この者は縛られ、夢中になり、狂い、自ら生れ、老い、病み、死に、悲しみ、汚れた存在でありながら、さらに生れ、老い、病み、死に、悲しみ、汚れた存在を追い求める。これが聖ならざる求めである。

ではなにが聖なる求めであるか？ここにあるもの達は自ら生れる存在でありながら、生れる存在の不利益を知り、生れることのない、この上ない安穩である涅槃を求める。自ら老いる存在でありながら、老いる存在の不利益を知り、老いることのない、この上ない安穩である涅槃を求める。自ら病む存在でありながら、病む存在の不利益を知り、病むことのない、この上ない安穩である涅槃を求める。自ら死ぬ存在でありながら、死ぬ存在の不利益を知り、死ぬことのない、この上ない安穩である涅槃を求める。自ら悲しむ存在でありながら、悲しむ存在の不利益を知り、悲しむことのない、この上ない安穩である涅槃を求める。自ら汚れた存在でありながら、汚れた存在の不利益を知り、汚れのない、この上ない安穩である涅槃を求める。これが聖なる求めである。

(世尊の聖求)

私もまた、実にまだ悟りを開く前、悟りを開かず、悟りを求めるべき時（菩薩）にあったとき、自ら生まれる存在でありながら、さらに生まれる存在を追い求めた。自ら老いる存在でありながら、さらに老いる存在を追い求めた。自ら病む存在でありながら、さらに病む存在を追い求めた。自ら死ぬ存在でありながら、さらに死ぬ存在を追い求めた。自ら悲しむ存在でありながら、さらに悲しむ存在を追い求めた。自ら汚れた存在でありながら、さらに汚れた存在を追い求めた。

その時、私につぎのような思いが生じた。「なぜ私は自ら生まれる存在でありながら、さらに生まれる存在を追い求めるのか。なぜ自ら老いる存在でありながら、さらに老いる存在を追い求めるのか。なぜ自ら病む存在でありながら、さらに病む存在を追い求めるのか。なぜ自ら死ぬ存在でありながら、さらに死ぬ存在を追い求めるのか。なぜ自ら悲しむ存在でありながら、さらに悲しむ存在を追い求めるのか。なぜ自ら汚れた存在でありながら、さらに汚れた存在を追い求めるのか。さあ、わたしは自ら生れる存在でありながら、生れる存在の不利益を知り、生れることのない、この上ない安穩である涅槃を求めよう。自ら老いる存在でありながら、老いる存在の不利益を知り、老いることのない、この上ない

い安穩である涅槃を求めよう。自ら病む存在でありながら、病む存在の不利益を知り、病むことのない、この上ない安穩である涅槃を求めよう。自ら死ぬ存在でありながら、死ぬ存在の不利益を知り、死ぬことのない、この上ない安穩である涅槃を求めよう。自ら悲しむ存在でありながら、悲しむ存在の不利益を知り、悲しむことのない、この上ない安穩である涅槃を求めよう。自ら汚れた存在でありながら、汚れた存在の不利益を知り、汚れのない、この上ない安穩である涅槃を求めよう、と。

そこで、私はのちに、漆黒<sup>しっこく</sup>の髪をそなえ、青春の幸せに満ちた、人生の第一期にあった青年であったけれども、それを望まない、顔に涙を浮かべ、嘆き悲しむ父母の前で髪とひげを落とし、袈裟<sup>けさ</sup>（雑）色の衣をまとい、家から家のない出家の生活に入った。

（アーラーラ・カーラーマ仙人との出会い）

このように出家の生活に入った私は、何か善なるものを求め、この上ない、すぐれた寂静の境地を求めつつ、アーラーラ・カーラーマ（という仙人）のもとへ近づいた。そしてアーラーラ・カーラーマにつぎのように言った。「君、カーラーマよ。私はこの教法と戒律において清浄なる行を修めたいのです。」

このように言ったときアーラーラ・カーラーマは私に言った。「住するがよい。尊者よ。この教法は、智慧のあるものはほどなくして、師の境地を自ら悟り、体験し、到達することができるものである」と。

比丘達よ、そこで私はすぐにその教法を会得した。それは唇を打つ程度、おしゃべりする程度のものであったが、智慧の教えを語り、長老の教えを語り、「知り、見ている」と自他ともに認めるものであった。

そのとき私はつぎのように思った。「アーラーラ・カーラーマはこの教えをただ信じている（確信）だけで”自ら知り、体験し、到達した”と語っているのではない。アーラーラ・カーラーマは実際にこの教えを知り、見ているのだ」と。

そこで比丘達よ、私はアーラーラ・カーラーマに近づいた。そしてつぎのように言った。「君、アーラーラ・カーラーマよ。あなたはどの程度にこの教えを自ら知り、体験し、到達しているのか」と。このように言ったとき、アーラーラ・カーラーマは無所有処<sup>むじょうじょ</sup>の境地（何も存在しないという精神統一の境地）を語った。

そのとき、私はこのように思った。「アーラーラ・カーラーマのみに確信があるのではない。私にも確信はある。アーラーラ・カーラーマのみに精進があるのではない。私にも精進はある。アーラーラ・カーラーマのみに念（注意力）があるのではない。私にも念はある。アーラーラ・カーラーマのみに三昧（精神統一）があるのではない。私にも三昧はある。アーラーラ・カーラーマのみに智慧（般若）があるのではない。私にも智慧はある。さあ、私も、アーラーラ・カーラーマが”自ら知り、体験し、到達した”と語っているその境地を、自ら体験するために努め励もう」と。

比丘達よ、そこで私はすぐにその境地を自ら知り、体験し、到達した。

そこで私はアーラーラ・カーラーマに近づいた。そしてアーラーラ・カーラーマにつきのように問うた。「この程度にあなたはこの境地を自ら知り、体験し、到達して語っているのですか？」

「私はこの程度に、この境地を自ら知り、体験し、到達して語っているのです。」

「私もまたこの程度にこの境地を自ら知り、体験し、到達しているのです」

「君よ。われわれはなんたる幸運だろう。君よ。たいへんなものを得ました。われわれが尊者のような修行者を見ることができたとは。私が自ら知り、体験し、到達したと語っているその境地を、あなたは自ら知り、体験し、到達した。あなたが自ら知り、体験し、到達したその境地を、私もまた自ら知り、体験し、到達したと語っている。私がその境地を知っているように、あなたもその境地を知っている。あなたがその境地を知っているように、私もその境地を知っている。私があるようにあなたはあり、あなたがあるように私もある。さあ、来なさい。ふたりで、この衆をひきいていきましょう。」

比丘達よ、このようにしてアーラーラ・カーラーマは私の師であり、私は弟子であったにもかかわらず、自身とまったく同等に私を立て、最高の尊敬をもって私を遇した。

比丘達よ、しかし、そのとき私は思った。「この教えは、この世を厭い離れるためにも、離欲のためにも、煩惱の止滅のためにも、寂靜のためにも、すぐれた知恵のためにも、覺りのためにも、涅槃のためにも役に立たない。ただ無所有<sup>むしやうしよ</sup>処の境地が得られるだけである」と。そこで私はその教えに満足することなくその教えを捨て、離れ去った。

(ウッダカ・ラーマプッタ仙人との出会い)

そこで比丘達よ、私はさらに、何か善なるものを求め、この上ない、すぐれた寂靜の境地を求めつつ、ウッダカ・ラーマプッタ（という仙人）のもとへ近づいた。そしてウッダカ・ラーマプッタにつきのように言った。「君よ。私はこの教法と戒律において清淨なる行を修めたいのです。」

このように言ったときウッダカ・ラーマプッタは私に言った。「住するがよい。尊者よ。この教法は智慧のあるものはほどなくして、師の境地を自ら悟り、体験し、到達することができるものである。」と。

比丘達よ、そこで私はすぐにその教法を会得した。それは唇を打つ程度、おしゃべりする程度のものであったが、智慧の教えを語り、長老の教えを語り、「知り、見ている」と自他ともに認めた。

そのとき私はつぎのように思った。「ラーマはこの教え（法）をただ信じている（確信）だけで”自ら知り、体験し、到達した”と語っているのではない。ラーマは実際にこの境地（法）を知り、見ているのだ」と。

そこで私は、比丘達よ、ウッダカ・ラーマプッタに近づいた。そしてつぎのように言った。「君、ラーマよ。あなたはどの程度にこの教えを自ら知り、体験し、到達しているのか」と。このように言ったとき、ウッダカ・ラーマプッタは非想非非想<sup>ひそうひひそうしよ</sup>処（<sup>おも</sup>想いが無いような、ないのでもないようなという精神統一の境地）を語った。



そのとき私はこのように思った。「ラーマのみに確信があるのではない。私にも確信はある。ラーマのみに精進があるのではない。私にも精進はある。ラーマのみに念（注意力）があるのではない。私にも念はある。ラーマのみに三昧（精神統一）があるのではない。私にも三昧はある。ラーマのみに智慧（般若）があるのではない。私にも智慧はある。さあ、私も、ラーマが”自ら知り、体験し、到達した”と語っている境地を自ら体験するために努め励もう」と。

比丘達よ、そこで私はすぐにその境地を自ら知り、体験し、到達した。

そこで私はウッダカ・ラーマプッタに近づいた。そしてつぎのように問うた。「この程度にあなたはこの境地を自ら知り、体験し、到達して語っているのですか？」

「私はこの程度にこの境地を自ら知り、体験し、到達して語っているのです。」

「私もまたこの程度にこの境地を自ら知り、体験し、到達しているのです」

「きみよ。われわれはなんたる幸運でしょう。君よ。たいへんなものを得ました。われわれが尊者のような修行者を見ることができたとは。ラーマが自ら知り、体験し、到達したと語っているその境地を、あなたは自ら知り、体験し、到達した。あなたが自ら知り、体験し、到達したその境地を、ラーマもまた自ら知り、体験し、到達したと語っているのです。ラーマがその境地を知っているように、あなたもその境地を知っている。あなたがその境地を知っているように、ラーマもその境地を知っている。ラーマがあるようにあなたはあり、あなたがあるように、ラーマもある。さあ、来なさい。この衆をひきいていきいなさい。」

比丘達よ、このようにしてウッダカ・ラーマプッタは私とともに修行するものでありながら、私を師の位に立て、最高の尊敬をもってわたしを遇した。

比丘達よ、しかし、そのときわたしは思った。「この教えは、この世を厭い離れるためにも、離欲のためにも、煩惱の止滅のためにも、寂靜のためにも、すぐれた知恵のためにも、覚りのためにも、涅槃のためにも役に立たない。ただ非想非非想處<sup>ひそうひひそうしよ</sup>の境地が得られるだけである」と。

そこで私はその教えに満足することなくその教えを捨て、離れ去った。

（菩提樹の下）

そこで、わたしは何か善なるものを求め、このうえない、すぐれた寂靜の境地を求めながら、マガタ国のウルヴェーラ村のセーナという部落に入った。そこにわたしはたいへん気持ちのよい場所、美しい林、清い川の流れ、よく築かれた堤、いたるところ実り豊かな土地を見た。

そのとき私は思った。「たいへんよい場所だ。林は美しい。きれいな川が流れ、堤はよく築かれ、気持ちよく、あたり一面、実り豊かな土地である。じつにここは修行の地を求めている良家の子息が努め励むために十分である。」と。

そこでわたしはここは修行のために最適であると考え、そこに坐った。

(三つの喩え)

さて、そこで修行に励んでいた私に、以前には聞いたことのない素晴らしい三つの喩えが思い浮かんだ。

たとえば、湿った生木が水の中に投げられているとしよう。そのときひとりの男が「火を起こして、暖<sup>だん</sup>を取ろう」と思って、上等の焚きつけを持ってやって来たとする。比丘達よ、どう思うか、その男はこの水の中に投げ捨てられた湿った生木に、上等の焚きつけを持ってきて火を起こしたとき、火を得ることができるであろうか。暖<sup>だん</sup>を取ることができるであろうか。」「いいえ、師よ。できません。それはどうしてかといいますと、この木は湿った生木であって、しかも水の中に投げ捨てられていたからです。かの男はただ疲労と心痛を得るだけでありましょう。」

「そのように比丘達よ、いかなる修行者であろうと、バラモンであろうと、(外側の)身体的な欲において静まっておらず、さらにまた、かれらの内側の欲において、欲にたいする意欲、欲にたいする執着、欲にたいする熱中、欲にたいする渴き、欲にたいする炎が、完全に捨てられておらず、完全に鎮まっていないならば、もし、かれらに鋭くまたひどい苦しみが襲ってきたとき、それらの苦痛を受けつつ、しかも無上の覚り、知識と直観<sup>ちけん</sup>(知見)を生じることとはできないであろう。どう思うか?」「いいえ。そのような修行者であれば、またバラモンであれば、もし鋭く、ひどい苦痛が襲ってきたとき、それらの苦痛を受けつつ、しかも無上の覚り、知識と直観(知見)を生じることとはできないと思われます。」

「比丘達よ、これがわたしに思い浮かんだ、以前には聞いたことのない一番目の素晴らしい喩えである。

つぎに、比丘達よ、以前には聞いたことのない二番目の素晴らしい喩えが思い浮かんだ。たとえば湿った生木が水<sup>みずべ</sup>辺から遠く、乾いた陸地に投げ捨てられてあったとしよう。そのとき、ひとりの男が「火を起こして、暖を取ろう」と思って、上等の焚きつけを持ってやって来たとする。比丘達よ、どう思うであろうか、その男はこの水辺から遠く、乾いた陸地に投げ捨てられた湿った生木に、上等の焚きつけを持ってきて火を起こしたとき、火を得ることができるであろうか。暖を取ることができるであろうか。」「いいえ、師よ。できません。それはどうしてかといいますと、この木はいくら水辺から遠く、乾いた陸地に投げ捨てられてあったとしても、湿った生木であるからです。かの男はただ疲労と心痛を得るだけでありましょう。」

「そのように、比丘達よ、いかなる修行者であろうと、バラモンであろうと(外側の)身体的な欲において静まっていたとしても、かれらの内側の欲において、欲にたいする意欲、欲にたいする執着、欲にたいする熱中、欲にたいする渴き、欲にたいする炎が、完全に捨てられておらず、完全に鎮まっていないならば、もし、かれらに鋭くまたひどい苦しみが襲ってきたとき、それらの苦痛を受けつつしかも無上の覚り、知識と直観(知見)を生じることとはできないであろう。どう思うか?」「いいえ。そのような修行者であれば、またバラモンであれば、もし鋭く、ひどい苦痛が襲ってきたとき、それらの苦痛を受けつつ、しかも無上の覚り、知識と直観(知見)を生じることとはできないと思われます。」

「比丘達よ、これがわたしに思い浮かんだ、以前には聞いたことのない二番目の素晴らしい喩えである。

つぎに、比丘達よ、以前には聞いたことのない三番目の素晴らしい喩えが思い浮かんだ。たとえば乾き、乾燥した木が水辺から遠く、乾いた陸地に投げ捨てられてあったとしよう。そのときひとりの男が「火を起こして、暖を取ろう」と思って、上等の焚きつけを持ってやって来たとする。比丘達よ、どう思うであろうか、その男はこの水辺から遠く、乾いた陸地に投げ捨てられた、乾き、乾燥した木に、上等の焚きつけを持ってきて火を起こしたとき、火を得ることができるであろうか。暖を取ることができるであろうか。」「はい、師よ。できます。それはどうしてかといいますと、この木は乾き、乾燥し、しかも水辺から遠く、乾いた陸地に投げ捨てられてあったものだからです。」

「そのように、比丘達よ、いかなる修行者であろうと、バラモンであろうと（外側の）身体的な欲において静まり、またかれらの内側の欲において、欲にたいする意欲、欲にたいする執着、欲にたいする熱中、欲にたいする渴き、欲にたいする炎が、完全に捨てられ、完全に鎮まっているならば、もしかれらに鋭くまたひどい苦しみが襲ってきたとしても、それらの苦痛を受けつつ、しかも無上の覚り、知識と直観（知見）を生じることにはできるのである。どう思うか？」「はい、そのような修行者、またバラモンであれば、もし鋭く、ひどい苦痛が襲ってきたときでも、それらの苦痛を受けつつ、しかも無上の覚り、知識と直観（知見）を生じることにはできると思われます。」

「比丘達よ、これがわたしに思い浮かんだ、以前には聞いたことのない三番目の素晴らしい喩えである。」

このように以前には聞いたことのない、三つの素晴らしい喩えが、そのとき、わたしに思い浮かんだのである。

（苦行）

比丘達よ、そのとき、わたしはこう思った。「さあ、歯の上に歯をしっかりと重ね、舌で上顎<sup>うわあご</sup>を押さえつけ、心によって心を捕まえよう、押さえつけよう、苦しめよう」と。

そこで、わたしは歯の上に歯をしっかりと重ね、舌で上顎<sup>うわあご</sup>を押さえつけ、心によって心を捕まえ、押さえつけ、苦しめた。

そのようにしているわたしの脇の下からは汗がしたたり落ちた。たとえば力のある男が自分より力の弱い男の頭をつかみ肩をつかみ、捕まえ、押さえつけ、苦しめるように、そのように比丘達よ、歯の上に歯をしっかりと重ね、舌で上顎を押さえつけ、心によって心を捕まえ、押さえつけ、苦しめているわたしの脇の下から、汗がしたたり落ちた。

わたしにひるむことのない勇猛なる精進があった。途切れることのない念の集中があった。わたしの身体には烈しい高揚感があり、鎮まることはなかった。しかし、比丘達よ、このようにして生じた苦痛が、そのような苦行に専心し、打ち込んでいるわたしの心を奪うということことはなかった。

（注：“苦行、苦しめる”の原語【tapas:タパス】には“燃やす”という意味もある）

（呼吸を止める行）

そのときわたしはこのように思った。「さあ、呼吸を止めた瞑想をしよう」と。

そこで比丘達よ、わたしは、口から、鼻から、呼吸を停止した。

このようにしているわたしに、耳を流れる風から起こる巨大な轟<sup>ごうおん</sup>音が生じた。たとえば、鍛冶屋がふいごを吹いたときに生じる巨大な音のようであった。このように比丘達よ、口による鼻による呼吸を停止したわたしに、耳を流れる風から起こる巨大な轟音が生じた。

わたしにひるむことのない勇猛なる精進があった。途切れることのない念の集中があった。わたしの身体には烈しい高揚感があり、鎮まることはなかった。しかし、比丘達よ、このようにして生じた苦痛が、そのような苦行に専心し、打ち込んでいるわたしの心を奪うということことはなかった。

そのとき比丘達よ、わたしはこのように思った。「さあ、さらに呼吸を止めた瞑想をしよう」と。

そこで比丘達よ、わたしは、口から、鼻<sup>とうちよう</sup>から、耳から、呼吸を停止した。

このようにしているとき、わたしの頭頂<sup>とうちよう</sup>を巨大な風が突き上げた。たとえば力の強い男が、先のとがった鋭いもので頭頂を打ち割るようであった。このように比丘達よ、口による、鼻による、耳による呼吸を停止したわたしの頭頂を巨大な風が突き上げた。

わたしにひるむことのない勇猛なる精進があった。途切れることのない念の集中があった。わたしの身体には烈しい高揚感があり、鎮まることはなかった。しかし、比丘達よ、このようにして生じた苦痛が、そのような苦行に専心し、打ち込んでいるわたしの心を奪うということことはなかった。

そのとき比丘達よ、わたしはこのように思った。「さあ、さらに呼吸を止めた瞑想をしよう」と。

そこで比丘達よ、わたしは、口から、鼻から、耳から呼吸を停止した。

このようにしているわたしに、猛烈な頭の痛みが起こった。たとえば力の強い男がじょうぶな革のバンドで頭の回りを巻きつけたようであった。このように比丘達よ、口による、鼻による、耳による呼吸を停止したわたしに、猛烈な頭の痛みが起こった。

わたしにひるむことのない勇猛なる精進があった。途切れることのない念の集中があった。わたしの身体には烈しい高揚感があり、鎮まることはなかった。しかし、比丘達よ、このようにして生じた苦痛が、そのような苦行に専心し、打ち込んでいるわたしの心を奪うということことはなかった。

そのとき比丘達よ、わたしはこのように思った。「さあ、さらに呼吸を止めた瞑想をしよう」と。

そこで比丘達よ、わたしは、口から、鼻から、耳から呼吸を停止した。

このようにしているわたしの腹部に、巨大な風がうねり起こった。たとえば比丘達よ、熟練した屠殺<sup>とさつぎよう</sup>業者か、屠殺業者の弟子が、鋭い刃物で腹部を切り開くようであった。このように比丘達よ、口による、鼻による、耳による呼吸を停止したわたしの腹部に、巨大な風がうねり起こった。

わたしにひるむことのない勇猛なる精進があった。途切れることのない念の集中があった。わたしの身体には烈しい高揚感があり、鎮まることはなかった。しかし、比丘達よ、このようにして生じた苦痛が、そのような苦行に専心し、打ち込んでいるわたしの心を奪うということことはなかった。

そのとき比丘達よ、わたしはこのように思った。「さあ、さらに呼吸を止めた瞑想をしよう」と。

そこで比丘達よ、わたしは、口から、鼻から、耳から呼吸を停止した。

このようにしているわたしに、比丘達よ、身体に巨大な熱が起こった。たとえば二人の力のある男が、自分より力の弱い男の手足をつかんで、炭の満ちた穴の上で炙り、苛め、苦しめるようであった。このように比丘達よ、口による、鼻による、耳による呼吸を停止したわたしに、比丘達よ、身体に巨大な熱が起こった。

わたしにひるむことのない勇猛なる精進があった。途切れることのない念の集中があった。わたしの身体には烈しい高揚感があり、鎮まることはなかった。しかし、比丘達よ、このようにして生じた苦痛が、そのような苦行に専心し、打ち込んでいるわたしの心を奪うということことはなかった。

(神々の加護)

比丘達よ、そのようなわたしを神々が見てつぎのように言った。「修行者ゴータマは死んだ」と。ある神々はつぎのように言った。「修行者ゴータマはまだ死んでいない。しかし(今)死ぬであろう」と。ある神々はつぎのように言った。「修行者ゴータマ死んではいない。今、死にもしない。修行者ゴータマは阿羅漢(供養に値するもの)である。阿羅漢とはこのようなものである」と。

(断食行)

そのときわたしはこのように思った。「さあ、一切の食物を断つ(に至る)修行をしよう」と。そのとき比丘達よ、わたしに神々が近づいてきて、つぎのように言った。「君、友よ、すべての食物を断つという修行を行ってはなりません。しかし、友よ、それでもあなたがすべての食物を断つ修行を行うというのなら、私たちはあなたの毛穴から神々の食物を差し入れてあげましょう。それによってあなたは生きていくことができるでしょう」

そのときわたしは思った。「わたしはすべての食物を食べない(修行をする)」ということに同意した。今、これらの神々が、神々の食事を毛穴から入れ、わたしがそれによって生きたとしたら、それによってわたしは嘘をついたことになる」と。

そこでわたしは比丘達よ、神々を退け、「わたしは十分だ」と答えた。

そのとき、わたしは思った。「さあ、少しずつ少しずつ、一粒ずつ一粒ずつ、食物を(徐々に減らしながら)摂ることにしよう。あるいはインゲン豆のスープか、空豆のスープか、あるいはエンドウ豆のスープを」。

そこで比丘達よ、わたしは少しずつ少しずつ、一粒ずつ一粒ずつ、食物を摂った。あるいはインゲン豆のスープか、空豆のスープか、あるいはエンドウ豆のスープを。

このようにしているわたしの身体は、比丘達よ、極度に羸衰した。たとえばわたしの手足は、この苦行により、実に八十歳の老人か、カーラ樹(葦)の節のようになった。この苦行により、たとえばわたしの臀部は駱駝の足のようにになった。この苦行により、たとえばわたしの背骨の上下の連なりは、球の連なったひものようになった。この苦行により、わたしの肋骨は、たとえば朽ちた館の屋根の骨組みが砕け落ちバラバラになるように、

そのように、砕け落ちバラバラになった。この苦行により、わたしの目は落ちくぼみ、その奥から光る目の輝きは、たとえば深い井戸の底にしずむ水に映る、遠い星の輝きのようであった。この苦行によりわたしの頭の皮は、たとえばまだ熟していない苦瓜が生のまま切り取られ、熱風に晒され、縮み、萎んだときのようにであった。

そのときわたしは、比丘達よ、腹の皮を触ろうとすると背骨をつかんだ。背骨を触ろうとすると腹の皮をつかんだ。この苦行によって、わたしの腹の皮と背骨とはくっついた。また私は大小便をしようと立ち上がると、そのまま、前のめりに倒れた。また私がこの身体を安めるために手で身体をさすると、根の腐った体毛が身体から落ちた。

比丘達よ、そのとき、このわたしを見て人々がこのように言った。「修行者ゴータマは黒い」と。ある人々はこのように言った。「修行者ゴータマは黒くない。黄色い。」と。ある人々はこのように言った。「修行者ゴータマは黒くないし、黄色くもない。土色である。」と。比丘達よ、この苦行によって、これほどまでにわたしの皮膚の色は落ち、白び、褪せた。

#### (最大の苦行の反省)

比丘達よ、そのときわたしはこのように思った。「いかなる過去の修行者であれ、バラモンであれ、鋭く烈しい苦痛をこうむり受けたものの中で、これが最高であろう。これより烈しくはなかったであろう。またいかなる未来の修行者であれ、バラモンであれ、鋭く烈しい苦痛をこうむり、受ける者であろうとも、これが最高であろう。これより烈しくはないであろう。またいかなる現在の修行者であれ、バラモンであれ、鋭く烈しい苦痛をこうむり、受けている者であろうとも、これが最高であろう。これより烈しくはないであろう。

しかし、わたしは、このような烈しく、為し難い行によっても人間を越えた、完全に聖なる特別な知見に到達しなかった。悟りのためにはまた別の道があるのではないか？」

#### (回顧)

比丘達よ、そのときわたしは思った。「わたしは（あの少年の日のことを）はっきりと覚えている。父なる釈迦族の祭りの日、涼しいジャンブー樹の木陰に坐り、欲を離れ、悪を離れ、まだ思考作用は残っているものの、欲から離れた喜びと、安楽のある最初の禅定の世界に到達したことを。そうだ、これが悟りのための道ではないのか？」と。

比丘達よ、そのとき、わたしにはっきりした確信（隨念識）が起こった。

「これこそが悟りのための道である」と。

#### (食を摂る)

そのときわたしは思った。「欲を離れ、悪を離れた楽を、私はなぜ恐れているのか？」。そして思った。「わたしは欲を離れ、悪を離れた楽を恐れる必要はない」と。

さらに私は思った。「このような極度の苦しみを受けている身体で、そのような楽に至るのは容易なことではない。さあ、わたしは粗大な食事、炊いたご飯を食べよう」と。

そこでわたしは粗大な食事、炊いた御飯を食べた。

比丘達よ、そのときわたしには五人の比丘達が仕えていた。〈修行者ゴータマは真理に到達するであろう。そして、その真理をわれわれに説くであろう〉と考えて。しかしわたしが粗大な食事、炊いた御飯を食べたとき、五人の比丘達はわたしを捨てて、離れ去った。「修行者ゴータマは贅沢だ。修行を捨て、贅沢な生活にもどった。」と。

#### (四禅定)

わたしは、食事を得、体力を快復し、欲を離れ、悪を離れ、まだ思考作用は残っているものの、欲から離れたことより生れる喜びと、安楽のある最初の禅定の世界（色界<sup>しきがい</sup> [三界<sup>さんがい</sup>の第二番目；精妙<sup>せいみょう</sup>な物質の世界]にある四つの世界 [天国<sup>ぼんてん</sup>]の第一番目：梵天界<sup>ぼんてん</sup>と同じ）に到達した。

しかし比丘達よ、このような楽がわたしに生じたが、心がそれによって奪われるということとはなかった。  
・・・・・・・・・・〈初 禅〉

思考作用がおさまったことによる、内側が静まった心の統一状態。思考作用も考察作用もなくなり、三昧より生じる喜びと楽のある二番目の禅定の世界に到達した。

しかし比丘達よ、このような楽がわたしに生じたが、心がそれによって奪われるということとはなかった。  
・・・・・・・・・・〈二 禅〉

喜びにたいして欲が離れ、平静（無関心：捨）にして正念<sup>しょうねん</sup>（常に気付いている）正知<sup>しょうち</sup>（常に知っている＝正念）、身体には楽（悦楽）を感じ、聖者達が「平静（無関心）にして念のある安楽な境地」と呼ぶ三番目の禅定の世界に到達した。

しかし比丘達よ、このような楽がわたしに生じたが、心がそれによって奪われるということとはなかった。  
・・・・・・・・・・〈三 禅〉

楽も捨てられ、苦しみも捨てられ、以前すでに快も不快も消滅している。苦でもなく楽でもない、平静（無関心）と念とが完全に清浄となった四番目の禅定の世界に到達した。

しかし比丘達よ、このような楽がわたしに生じたが、心がそれによって奪われるということとはなかった。  
・・・・・・・・・・〈四 禅〉

#### （三 明一三つの知識 [神通]<sup>さんみょう じんづう</sup> 宿明通）

このように統一され、清浄となり、輝き、痘痕<sup>きず</sup>なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、以前の生活を思いだす知識（宿明通<sup>しゆくみょうつう</sup>）へと心を傾けた。

（そのとき）無数の様々な以前の生活を思いだした。たとえば一つの人生、二つの人生、三つの人生、四つの人生、五つの人生、十の人生、二十の人生、三十の人生、四十の人生、五十の人生、百の人生、千の人生、一万の人生、無数の成劫<sup>じょうこう</sup>（人間の生老病死<sup>しょうろうびようし</sup>と同様に宇宙にも成<sup>じょう</sup>、住<sup>じゅう</sup>、壊<sup>え</sup>、空<sup>くう</sup>の四つの時期<sup>こう</sup>〈劫：（原語）kalpa 長い時間の意〉がある）、無数の壊劫<sup>えこう</sup>、無数の成壊劫<sup>じょうえこう</sup>を思いだした。

「ここにいた。このような名前。このような姓。このような皮膚の色。このような食べ物。このような苦しみ、このような楽。何歳で死に、そしてここを去り、あそこに生れ、

あそこにいた。このような名前。このような姓。このような皮膚の色。このような食べ物。このような苦しみ、楽を受けた。何歳で死に、そしてここを去り、今ここに生まれた」と。  
このように（視覚的）特徴と詳細を伴った、無数の様々な以前の生活を思いだした。

このようにしてわたしは、比丘達よ、夜の第一番目の更において、最初の明知<sup>めいち</sup>に到達した。無明<sup>むみょう</sup>は破壊され、明知が生じた。暗黒は吹き払われ、光りが生じた。専心し、努力し、努め励む者に起こったことはこのようなことであった。

しかし比丘達よ、このような楽がわたしに生じたが、心がそれによって奪われるということとはなかった。

（天眼通）

このように統一され、清浄となり、輝き、痘痕<sup>きず</sup>なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、もろもろの生きものの死と誕生を知る知識<sup>てんげんつう</sup>（天眼通）へと心を傾けた。

（そのとき）清浄な人間を越えた天眼で生きものたちを見た。死につつある者。生まれつつある者。劣った者。優れた者。性質のよい者。性質の悪い者。順調な者。障害の多い者。また自らの行いに応じて進んでいく生きものを見た。「これらの生きものたちは、ああ、身による悪い行いによる業<sup>ごう</sup>（身悪業）をともなっている。言葉による悪い行いによる業<sup>く</sup>（口悪業）をともなっている。心による悪い行いによる業<sup>い</sup>（意悪業）をともなっている。聖なるものに対して悪くいった人。間違った考え方を持った人。間違った考えをし、さらに行いもした人。彼らは身が敗れてのち、あの世に赴いて、惨く<sup>むご</sup>、酷く<sup>ひど</sup>、落ちていく、地獄に生れる。」

「ああ、これらの生きものたちは身による善い行いによる業<sup>よ</sup>（身善業）をともなっている。言葉による善い行いによる業<sup>く</sup>（口善業）をともなっている。心による善い行いによる業<sup>い</sup>（意善業）をともなっている。聖なるものを悪くいわなかった人。正しい考え方（正見）を持った人。正しい考えと行いを共にした人。彼らは身が敗れてのち、善いところ、神々の世界（天国）に生れる。」

このように清浄な人間を越えた天眼で生きものたちを見た。死につつある者。生まれつつある者。劣った者。優れた者。性質のよい者。性質の悪い者。順調な者。障害の多い者。また自らの行いに応じて進んでいく生きものを見た。

このようにしてわたしは、比丘達よ、夜の第二番目の更において、二番目の明知に到達した。無明は破壊され、明知が生じた。暗黒は吹き払われ、光りが生じた。専心し、努力し、努め励む者に起こったことはこのようなことであった。

しかし比丘達よ、このような楽がわたしに生じたが、心がそれによって奪われるということとはなかった。

（漏尽通一悟り）

このように統一され、清浄となり、輝き、痘痕<sup>きず</sup>なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、汚れ（原意：漏れ出すもの、漏）の滅尽<sup>ろじんつう</sup>（漏尽通）へと心を傾けた。



（そのとき）「これは苦である」とありのままに知った（如実知）。「これは苦の生起（原因）である」とありのままに知った。「これは苦の止滅である」とありのままに知った。

「これは苦の止滅に至る道である」とありのままに知った。「これは汚れである」とありのままに知った。「これは汚れの生起（原因）である」とありのままに知った。「これは汚れの止滅である」とありのままに知った。「これは汚れの止滅に至る道である」とありのままに知った。

このように知り、このように見ているとき、欲の汚れ（欲漏<sup>よくろ</sup>）から心は解脱した。存在の汚れ（有漏<sup>うろ</sup>）から心が解脱した。無明の汚れ（無明漏<sup>むみょうろ</sup>）から心が解脱した。解脱したとき、「解脱したのだ」という知識が生じた。「生れることは尽き、清<sup>しょう</sup> 浄<sup>じょう</sup> 行は完成した。為すべきことは為しおえた。再びこの世界にもどってくることはない。」と覚った。

このようにしてわたしは、比丘達よ、夜の最後の更において、三番目の明知に到達した。無明は破壊され、明知が生じた。暗黒は吹き払われ、光りが生じた。専心し、努力し、努め励む者に起こったことはこのようなことであつた。

しかし比丘達よ、このような楽がわたしに生じたが、心がそれによって奪われるということとはなかった。

#### 《十二因縁》

（順観）

世尊は七日間、足を組んだまま、解脱の楽を感じながら坐っておられた。七日間がすぎた後、三昧よりお戻りになり、夜の最初の更、縁起の理法を順番によく思念された。

“これがあるとき、かれがある。これが生じたとき、かれが生じる。つまり、①無明（も<sup>むみょう</sup>のごとをよく知らないこと。特に四つの聖なる真理を知らないこと【無知】）によって②行（形成作用、この世を造り上げる力。過去に行<sup>おこな</sup>った【業<sup>ごう</sup>】のこと）があり、行によって③識（輪廻していく【意識<sup>しき</sup>】）があり、識によって④名色（現在の【心<sup>みょうしき</sup>〈名〉と体<sup>こころ</sup>〈色〉】）があり、名色によって⑤六処（【六つの場所：眼、耳、鼻、舌、身、意<sup>からだ</sup>】）があり、六処によって⑥触（【対象と触れること<sup>ろくしよ</sup>】）があり、触によって⑦受（苦、楽、不苦不楽の【感覺<sup>じゆ</sup>】）があり、受によって⑧渴愛（【欲望<sup>かつあい</sup>】）があり、渴愛によって⑨取（【固執<sup>しゆ</sup>】）があり、取によって⑩有（【来世の土台】業〈カルマ〉と同じ）があり、有によって⑪生（【生れること<sup>しやう</sup>】）があり、生によって⑫老、死、悲しみ、嘆き、苦しみ、悩み、憂いが生じる。このようにして、すべての苦の集まりの生起がある。”

そのとき世尊はこの意味をお知りになり、この感興の言葉を述べられた。

実に、熱心に瞑想するバラモンに

真理が明らかとなったとき

すべての疑いは吹き払われた

存在するものには原因があるということを悟って

(逆観)

つぎに世尊は、夜の二番目の更に、縁起の理法を逆順によく思念された。

”これがないとき、かれがない。これが止滅すれば、かれが止滅する。つまり無明が止滅することによって行が止滅する。行が止滅することによって識が止滅する。識が止滅することによって名色が止滅する。名色が止滅することによって六処が止滅する。六処が止滅することによって触が止滅する。触が止滅することによって受が止滅する。受が止滅することによって渴愛が止滅する。渴愛が止滅することによって取が止滅する。取が止滅することによって有が止滅する。有が止滅することによって生が止滅する。生が止滅することによって老、死、悲しみ、嘆き、苦しみ、悩み、憂いが止滅する。このようにして、すべての苦しみの集まりの止滅がある。”

そのとき世尊はこの意味をお知りになり、この感興の言葉を述べられた。

実に、熱心に瞑想するバラモンに  
真理が明らかとなったとき  
すべての疑いは吹き払われた  
依りどころの消滅を知ることにより

(順逆観)

つぎに世尊は、夜の最後の更に、縁起の理法を順逆によく思念された。

“これがあるとき、かれがある。これが生じたとき、かれが生じる。つまり、無明によって行があり、行によって識があり、識によって名色があり、名色によって六処があり、六処によって触があり、触によって受があり、受によって渴愛があり、渴愛によって取があり、取によって有があり、有によって生があり、生によって老、死、悲しみ、嘆き、苦しみ、悩み、憂いが生じる。このようにしてすべての苦の集まりの生起がある。

しかしながら、欲を離れることにより、無明が残りにく止滅することによって、行が止滅する。行が止滅することによって識が止滅する。識が止滅することによって名色が止滅する。名色が止滅することによって六処が止滅する。六処が止滅することによって触が止滅する。触が止滅することによって受が止滅する。受が止滅することによって渴愛が止滅する。渴愛が止滅することによって取が止滅する。取が止滅することによって有が止滅する。有が止滅することによって生が止滅する。生が止滅することによって老、死、悲しみ、嘆き、苦しみ、悩み、憂いが止滅する。このようにして、すべての苦しみの集まりの止滅がある。”

そのとき世尊はこの意味をお知りになり、この感興の言葉を述べられた。

実に、熱心に瞑想するバラモンに  
真理が明らかとなったとき  
悪魔の軍隊を滅ぼした  
太陽が空に輝くように

(説法への意欲が衰える)

そのとき私は思った。「このわたしが到達した境地は深く、見難く、覚り難く、寂<sup>じやくじょう</sup> 静<sup>じやう</sup>、殊<sup>しゆしやう</sup> 勝であり、思いと言葉を越え、微妙であり、賢者のみ知りうるものである。ところが人々はなずんだ執着を楽しみ、なずんだ執着を好み、なずんだ執着を喜んでいる。このような人々に、すべてのものごととは関係しあっていること(因縁<sup>いんねん</sup>)、すべてのできごとは縁(原因<sup>えんぎ</sup>)によって起こること(縁起)、これらの事実は覚り難いであろう。また、この世(未来)を作りあげる力(行[ぎょう]; 形成作用)がすべて鎮まり、地上のすべてのもの(ウパディ: 穢悪法)から離れ去り、渴愛が滅尽し、欲から離れ、煩惱が止滅した涅槃<sup>ねはん</sup>は覚り難いであろう。わたしがもし法を説いたとしても、他の人々は覚らないであろう。それはわたしに疲れと心労をもたらすだけであろう」と。

そのとき、私に以前には聞いたことのない、これらの未曾有の詩が湧き起こった。

わたしが苦勞して到達した法は、今はまだ説き明かすべきではない  
欲と怒りに苛<sup>さいな</sup>まれている者達には、この法は覚り難い<sup>ほう</sup>  
流れに逆らい、微妙で、深く、見難く、微細なものを  
貪りに耽<sup>ふけ</sup>り、暗黒の塊<sup>かたまり</sup>に覆われた者達は見ないであろう

このように思いを巡らせていたわたしに、しだいに説法への意欲は失われていった。

ぼんてんかんじやう  
(梵天勸請)

そのとき、この世界の主(創造主)である梵天<sup>ぼんてん</sup>は心中でわたしのこころの思いを知り、このように思った。「ああ、実に、この世は滅びる。ああ、実に、この世は消滅する。如来<sup>にょらい</sup>であり、阿羅漢<sup>あらかん</sup>であり、正しく覚った者の心が説法のために意欲が傾かないとは」と。

比丘達よ、そのとき、この世の主、梵天は、たとえば力のある男が屈した腕を伸ばすように(パンチ)、また伸ばした腕をふたたび屈するように、このようにすみやかに梵天界から姿を消し、わたしの前に姿を現した。そのとき、この世界の主、梵天は左の肩に上衣を掛け、わたしに向けて合掌を捧げつつ、このように言った。

「尊者よ。法をお説きください。善逝<sup>ぜんせい</sup>(幸福な人の意)よ、法をお説きください。汚れの少ない者達がおります。しかし教えを聞かなければ捨てられます。また教えを聞けば智慧のあるものとなりましょう。」

比丘達よ、このように、この世の主、梵天は言って、つぎの詩を唱えた。

以前、マガダ国に  
不浄な者達の考えた、汚れた教えが現れた  
(それゆえ、)この不死の門を開け  
そして人々は、汚れない者によって覚られた教えを聞け

山の頂上にある岩の上に立って  
四方の人々を見るように

このように、智慧のあるものよ  
法（真理）の高たか殿どのに上り、遍く見る者よ  
悲しみにおちいったものたちを、悲しみを離れたものよ  
みそなわしたまえ、生と死に打ち勝った者よ

立て、勇者よ。戦いに勝利した者よ。  
隊たい商しょう主しゅよ。負債ふさいなきものよ。世間を歩め  
法を説け、世尊よ、智慧のあるものとなるように

そのとき私は梵天の求めを知って、人々にたいする憐れみの心から、仏ぶつ眼げんをもって世間を見渡した。仏眼をもって世間を見渡したわたしは、汚れの少ない者、中位の者、汚れの多い者、機知きちのすぐれた者、愚鈍ぐどんな者、性質のよい者、性質の悪い者、教えやすいもの、教えにくいもの、あの世における罪おその畏れを見つつ生活している者、また、そうでないものを見た。

それはたとえば青蓮華あおれんげ池や、赤蓮華あかれんげ池や、白蓮華びやくれんげ池で、青蓮華、赤蓮華、白蓮華が、あるものは水の中で生じ、水の中で成長し、水の中で沈んだまま養われるように、またあるものは水の中で生じ、水の中で成長し、水面に等しい高さまで達するように、またあるものは水の中で生じ、水の中で成長し、水面を越えて、水に汚されることなく立っているように、そのように仏眼をもって世間を見渡したわたしは、汚れの少ない者、中位の者、汚れの多い者、機知のすぐれた者、愚鈍な者、よい性質の者、悪い性質の者、教えやすいもの、教えにくいもの、あの世における罪の畏れを見つつ生活している者、そうでないものを見た。

そのとき、私はこの世の主、梵天に詩をもって答えた。

不死の門が、かれら、  
耳あるものたちに開かれた。信仰を解き放て  
人々を損なうという想いから  
すぐれた法を人々に説かなかったのだ。梵天よ

そのとき、この世の主、梵天は「世尊に法を説かせるという、私が現れた目的は達せられた」と考え、わたしに挨拶をし、右回りの礼をして、その場で消え失せた。

（最初の説法）

比丘達よ、そのとき私は思った。「だれに最初に法を説くべきであろうか。だれがこの法をすみやかに理解するであろうか」と。

この時、私はつぎのように思った。「このアーラーラ・カーラーマは賢者であり、聡明であり、智者であり、（輪廻の）長夜に涉って汚れの少ない者であった。さあ、アーラーラ・カーラーマにまず法を説こう。彼はこの法をすみやかに理解するであろう。」

そのとき神（天国にいる者）が私に近づいて来てこのように言った。

「尊者よ、七日前に、アーラーラ・カーラーマは亡くなりました」と。  
智慧と直覚が私にも開かれた。「アーラーラ・カーラーマ七日前に亡くなった」と。  
そのとき私は思った。「アーラーラ・カーラーマは偉大なる識者であった。もしこの法を知ったならば、すみやかに理解したであろうに」と。

比丘達よ、そのとき私は思った。「だれに最初に法を説くべきであろうか。だれがこの法をすみやかに理解するであろうか」と。

この時、私はつぎのように思った。「このウッダカ・ラーマプッタは賢者であり、聡明であり、智者であり、(輪廻の)長夜に涉って汚れの少ない者であった。さあ、ウッダカ・ラーマプッタにまず法を説こう。彼はこの法をすみやかに理解するであろう。」

そのとき神(天国にいる者)が私に近づいて来てこのように言った

「尊者よ、昨夜、ウッダカ・ラーマプッタは亡くなりました」と。

智慧と直覚が私にも開かれた。「ウッダカ・ラーマプッタは昨夜、亡くなった」と。

そのとき私は思った。「ウッダカ・ラーマプッタは偉大なる識者であった。もしこの法を知ったならば、すみやかに理解したであろうに」と。

比丘達よ、そのとき私は思った。「だれに最初に法を説くべきであろうか。だれがこの法をすみやかに理解するであろうか」と。

この時、私はつぎのように思った。「私が専心、努め励んでいたときに、尽力し仕えてくれた五人の仲間の比丘達がいる。さあ、かれらにまず法を説こう」と。

そのとき、私は思った。「今かれらはどこにいるだろうか」と。比丘達よ、わたしは人間の眼を越えた清浄なる天眼をもって五人の仲間の比丘達が、ベナレスの仙人たちの住む鹿野園ろくやおんにいるのを見た。

(ウパカとの邂逅)

そして、わたしはウルヴェーラーの村に心ゆくまで滞在したのち、ベナレスに向って、徒歩で赴いた。ときにアーギーヴィカ教徒のウパカという者が、菩提樹のもとからガヤーの村に向う途中のわたしを見出した。見てから、わたしにこのように言った。

「あなたの感覚器官は非常に澄んでいる。またあなたの皮膚の色は非常に清らかで、輝いている。あなたはだれを師と仰いで出家したのか。だれがあなたの師なのか。だれの教えをあなたは喜んでいるのか。」

このように言われたとき、わたしはウパカというアーギーヴィカ教徒に詩をもって答えた。

わたしは一切に打ち勝ち、一切を知った  
一切のものに汚されることなく  
一切を捨てた。渴愛は尽き、解脱したのだ  
自ら知ったのだから、だれを師と仰ごうか？

わたしに師はいない。わたしに等しいものは見出されない  
わたしに並びうるものは、この神々のいる世の中に存在しない

わたしは世の供養に値するもの、無上の師  
唯一の正しく覚ったものである  
燃えるものは尽き、炎は消えた

法の輪を回すためにわたしはカーシーの町（ベナレス）に赴き  
盲目の状態にある世の中に、不死の鼓を打つであろう

「あなたは無限の勝者であると認めるのですか？」（と、ウパカはいった）

漏れ出す不浄のもの（漏<sup>ろ</sup>：煩惱）の尽きたものは、わたしと同じく勝者です。  
わたしは悪に打ち勝った。だから勝者だということです、ウパカよ。

比丘達よ、このように言ったときアーjeeヴィカ教徒のウパカは「友よ。そうかも知れぬ」といって首を振りながら、道<sup>みち</sup>を逸れて行った。  
（このウパカはのちに婦とともに仏弟子となる）

（五人の比丘達）

こうしてわたしは、徒歩で歩いていきながら、次第にベナレスの仙人の住むところ、  
鹿野園<sup>ろくやおん</sup>の五人の比丘達のいるところに近づいていった。かれらはわたしが遠くから近づいてくるのを見ると、お互いに約束を交わした。

「友よ、ここに沙門ゴータマが近づいてくる。贅<sup>ぜいたく</sup>沢で、修行を捨て、贅<sup>ぜいたく</sup>沢な生活にもどったものだ。だから挨拶はしてやるまい。立って出迎えることもすまい。彼の衣鉢<sup>いはつ</sup>も受け取ってやるまい。しかしもし彼が座ることを望めば、座る所くらいはつくってやらねばなるまい。」

しかし、わたしが近づくにつれて、五人の比丘達は自らの約束を守ることができなくなった。あるものはわたしを迎え、衣鉢を受け取った。あるものは座席を作った。あるものは足を洗うための水を用意した。

しかし、わたしに名をもって呼びかけ、また”友よ”と語りかけた。

わたしは五人の比丘達に言った。「比丘達よ。如<sup>にょらい</sup>来（修行を完成した人）にたいして名をもって呼びかけたり、”友よ”と語りかけてはならない。如来は、供養に値するもの（阿羅漢）、正しく悟りを開いたものである。比丘達よ、耳を傾けよ。不死は得られた。わたしは教えよう。法を説<sup>りょうけ</sup>こう。教えられた通りに実践すれば、ほどなくして、その目的のために良<sup>りょうけ</sup>家の子息たちが正しく家を捨て、家なき状態に出家した、無上の清浄行の完成を現世<sup>げんせ</sup>において自ら知り、体験し、到達するであろう。」

このように言われて五人の比丘達はわたしに言った。「友、ゴータマよ。あのあなたの行動、あなたの実践、あのあなたの為<sup>な</sup>し難き行為によっても、人間を越えた、完全に特別な、聖なる知見<sup>ちけん</sup>に到達しなかった。しかし贅<sup>ぜいたく</sup>沢になり、修行を捨て、贅<sup>ぜいたく</sup>沢な生活にもどった今のあなたが、どうして人間を越えた、完全に特別な聖なる知見に到達するということがありえるだろうか」と。

このように言われて、わたしは、かれらに答えた。「如来は贅沢ではない。修行を捨ててはいない。贅沢な生活にもどってはいない。比丘達よ、如来は供養に値するもの、正しく悟りを開いたものである。比丘達よ、耳を傾けよ。不死は得られた。わたしは教えよう。法を説こう。教えられた通りに実践すれば、ほどなくして、その目的のために良家の子息たちが正しく家を捨て、家なき状態に出家した、その無上の清浄行の完成を、現世において自ら知り、体験し、到達するであろう。」

二たび、五人の比丘達はわたしに言った。「友、ゴータマよ。あのあなたの行動、あなたの実践、あのあなたの為し難き行為によっても、人間を越えた、完全に特別な、聖なる知見に到達しなかった。しかし贅沢になり、修行を捨て、贅沢な生活にもどった今のあなたが、どうして人間を越えた、完全に特別な聖なる知見に到達するということがありえるだろうか」と。

このように言われて、わたしは二たびかれらに答えた。「如来は贅沢ではない。修行を捨ててはいない。贅沢な生活にもどってはいない。比丘達よ、如来は供養に値するもの、正しく悟りを開いたものである。比丘達よ、耳を傾けよ。不死は得られた。わたしは教えよう。法を説こう。教えられた通りに実践すれば、ほどなくしてその目的のために良家の子息たちが正しく家を捨て、家なき状態に出家した、その無上の清浄行の完成を、現世において自ら知り、体験し、到達するであろう。」

三たび、五人の比丘達はわたしに言った。「友、ゴータマよ。あのあなたの行動、あなたの実践、あのあなたの為し難き行為によっても、人間を越えた、完全に特別な、聖なる知見に到達しなかった。しかし贅沢になり、修行を捨て、贅沢な生活にもどった今のあなたが、どうして人間を越えた、完全に特別な聖なる知見に到達するということがありえるでしょうか」と。

このように言われてわたしは五人の比丘達に言った。「比丘達よ、わたしがこのように輝いているのを、あなた達は今までに見たことがあるか?」「いいえ、存じません。」

「如来は贅沢ではない。修行を捨ててはいない。贅沢な生活にもどってはいない。比丘達よ、如来は供養に値するもの、正しく悟りを開いたものである。比丘達よ、耳を傾けよ。不死は得られた。わたしは教えよう。法を説こう。教えられた通りに実践すれば、ほどなくしてその目的のために良家の子息たちが正しく家を捨て、家なき状態に出家した、その無上の清浄行の完成を、現世において自ら知り、体験し、到達するであろう。」

比丘達よ、このようにして、わたしはようやく五人の比丘達に教えることができた。

ふたりの比丘達に教えているときは、三人の比丘達が托鉢に出かけ、その托鉢で得たもので六人が生活した。三人の比丘達に教えているときは、二人の比丘達が托鉢に出かけ、その托鉢で得たもので六人が生活した。

## 《初転法輪》

そのとき世尊は五人の比丘達に呼びかけた。

### (中道)

比丘達よ、出家したものがしてはならない二つの極端がある。一つは欲の悦楽に身を寄せた生活（快樂主義）である。低劣で、卑俗で、凡俗で、聖ならず、目的にそぐわないものである。一つは自らを苦しめる生活（苦行）である。苦しく、聖ならず、目的にそぐわない。これらの二つの極端に近づくことなく、如来によって中道が悟られた。これは眼を創り、智慧を創り、寂靜のため、すぐれた知恵のため、悟りのため、涅槃のために役立つものである。

### (八正道)

比丘達よ、では、何が眼を創り、智慧を創り、寂靜のため、高い知恵のため、悟りのため、涅槃のために役立つもの、如来によって悟られた中道であろうか。

これらの聖なる八つの道がそれである。すなわち（１）正見（正しい意見）、（２）正思惟（正しい考え方：少欲、非暴力）、（３）正語（正しい言葉）、（４）正業（正しい行為）、（５）正命（正しい生活）、（６）正精進（正しい努力）、（７）正念（正しい注意）、（８）正定（正しい精神統一）、これらが比丘達よ、如来によって悟られた、眼を創り、智慧を創り、寂靜のため、高い知恵のため、悟りのため、涅槃のために役立つ中道である。

### (四つの聖なる真理—四諦)

#### 〈苦諦〉・・・四苦八苦

これが「苦」という聖なる真理である。（１）生れるのも苦であり。（２）老いるのも苦であり、（３）病むことも苦であり、（４）死ぬことも苦であり、（５）嫌いなものと出会うことも苦であり（怨憎会苦）、（６）愛する者と別れることも苦であり（愛別離苦）、（７）望むものが得られないことも苦であり（求不得苦）、（８）要するに五つの執着の集まり（五取蘊：色【身体】、受【感覚】、想【概念】、行【意志】、識【意識】）は苦である（五蘊盛苦）。

#### 〈集諦〉

これが「苦の生起（原因）」という聖なる真理である。さらなる再生を導き、喜びと欲がともない、ここかしこで喜んでいるこれらの渴愛、すなわち（１）欲の渴愛（欲愛）、（２）生存の渴愛（有愛—生存欲）、（３）破壊の渴愛（無有愛—破壊欲）である。

#### 〈滅諦〉

これが「苦の消滅」という聖なる真理である。欲から離れることによって、渴愛が完全に消滅した状態、放棄、捨離、解脱、いかなる執着もないものがそれである。

#### 〈道諦〉

これが「苦の滅尽に至るための道」という聖なる真理である。すなわちこれらの八つの聖なる道、「正見」、「正思惟」、「正語」、「正業」、「正命」、「正精進」、「正念」、「正定」がそれである。



(四諦十二行相)

また比丘達よ、わたしに、以前には聞いたことのない真理において眼が生じ、知識が生じ、智慧が生じ、明知が生じ、光りが生じた。

「これが苦という聖なる真理である」と。 1ー①

また比丘達よ、わたしに、以前には聞いたことのない真理において眼が生じ、知識が生じ、智慧が生じ、明知が生じ、光りが生じた。

「この苦という聖なる真理を知り尽くすべきである」と。 1ー②

また比丘達よ、わたしに、以前には聞いたことのない真理において眼が生じ、知識が生じ、智慧が生じ、明知が生じ、光りが生じた。

「この苦という聖なる真理を知り尽くした」と。 1ー③

また比丘達よ、わたしに、以前には聞いたことのない真理において眼が生じ、知識が生じ、智慧が生じ、明知が生じ、光りが生じた。

「これが苦の生起（原因）という聖なる真理である」と。 2ー①

また比丘達よ、わたしに、以前には聞いたことのない真理において眼が生じ、知識が生じ、智慧が生じ、明知が生じ、光りが生じた。

「この苦の生起（原因）という聖なる真理を捨て去るべきである」と。 2ー②

また比丘達よ、わたしに、以前には聞いたことのない真理において眼が生じ、知識が生じ、智慧が生じ、明知が生じ、光りが生じた。

「この苦の生起（原因）という聖なる真理を捨て去った」と。 2ー③

また比丘達よ、わたしに、以前には聞いたことのない真理において眼が生じ、知識が生じ、智慧が生じ、明知が生じ、光りが生じた。

「これが苦の消滅という聖なる真理である」と。 3ー①

また比丘達よ、わたしに、以前には聞いたことのない真理において眼が生じ、知識が生じ、智慧が生じ、明知が生じ、光りが生じた。

「この苦の消滅という聖なる真理を自ら体験すべきである」と。 3ー②

また比丘達よ、わたしに、以前には聞いたことのない真理において眼が生じ、知識が生じ、智慧が生じ、明知が生じ、光りが生じた。

「この苦の消滅という聖なる真理を自ら体験した」と。 3ー③

また比丘達よ、わたしに、以前には聞いたことのない真理において眼が生じ、知識が生じ、智慧が生じ、明知が生じ、光りが生じた。

「これが苦の消滅に至る道という聖なる真理である」と。 4ー①

また比丘達よ、わたしに、以前には聞いたことのない真理において眼が生じ、知識が生じ、智慧が生じ、明知が生じ、光りが生じた。

「この苦の消滅に至る道という聖なる真理を修しゅじゅう習すべきである」と。 4ー②

また比丘達よ、わたしに、以前には聞いたことのない真理において眼が生じ、知識が生じ、智慧が生じ、明知が生じ、光りが生じた。

「この苦の消滅に至る道という聖なる真理を修習した」と。 4ー③

わたしは、これら四つの聖なる真理における三<sup>さんじゅう</sup>重で十二通りの知見が、わたしに清らかにありのままに<sup>あらわ</sup>顕れない限り、この神々と悪魔、梵天の世界において、修行者・バラモン、神々・人間という生き物たちの中で、無上の正しい悟りを覚ったとは認めなかった。

ところが、これら四つの聖なる真理における三重で十二通りの知見が、わたしに清らかにありのままに顕れた。そこで、この神々と悪魔、梵天の世界において、修行者・バラモン、神々・人間という生き物たちの中で、無上の正しい悟りを覚ったと認めた。

「知識と直観<sup>ちけん</sup>（知見）が生まれた。わたしの心の解脱は不動である。これが最後の生涯である。今や、さらなる再<sup>さいせい</sup>生はない」と。

（コンダンニャ尊者の悟り）

この説明が話されているとき、コンダンニャ尊者に塵<sup>ちり</sup>を離れ、汚<sup>けが</sup>れを離れた法<sup>ほう</sup>の眼<sup>め</sup>が生じた。

「およそ生じるものはすべて、それは消滅するものである」と。

このとき、地上の神々は声を上げた。

「ここ、ベナレスの仙人の住するところ、鹿野園において、世尊<sup>ろくやおん</sup>によって法の輪は回された（<sup>てんぽうりん</sup>転法輪）。修行者によっても、バラモンによっても、神によっても、悪魔によっても、梵天によっても、この世のいかなるものによっても反転させえない輪を」と。

地上の神々の声を聞いて、四天王天<sup>してんのうてん</sup>（東西南北を守護する神々がいる天国）の神々は声を上げた。

「ここ、ベナレスの仙人の住するところ、鹿野園において、世尊によって法の輪は回された。修行者によっても、バラモンによっても、神によっても、悪魔によっても、梵天によっても、この世のいかなるものによっても反転させえない輪を」と。

四天王天の神々の声を聞いて、三十三天<sup>さんじゅうさんてん</sup>（帝釈天<sup>たいしゃくてん</sup>が率いる33人の神々がいる天国）の神々、ヤマ天<sup>えんま</sup>（閻魔王のいる天国）の神々、兜率天<sup>とそつ</sup>（信心深い仏教徒がいく天国）の神々、自化楽天（自分で好きなものを作り出して楽しめる天国）の神々、他化自在天<sup>たけじざい</sup>（他人のつくり出したものを自在につかえる天国）の神々〔以上、欲界<sup>よくかい</sup>（三<sup>さん</sup>界の第一番目；欲の支配する世界）の六つの天国〕、梵衆天<sup>ぼんしゅう</sup>（色界<sup>しきかい</sup>〔三界の第二番目；精妙な物質の世界〕に四つある天国の中の第一番目「梵天<sup>ぼんてん</sup>」に属する）の神々はそれぞれ声を上げた。

「ここ、ベナレスの仙人の住するところ、鹿野園において、世尊によって法の輪は回された。修行者によっても、バラモンによっても、神によっても、悪魔によっても、梵天によっても、この世のいかなるものによっても反転させえない輪を」と。

（注：これ以上の神々の世界（天国）もあるが仏典にはあまり出てこない）

このようにして瞬時に、一刹那<sup>せつな</sup>に、梵天に至る世界に声は達した。この百万の宇宙世界は動き、揺れ動き、振動した。神々と神々の威力を越えた量り知れない高貴な光りが世に現れた。

そのとき世尊は感嘆の声を発した。

「ああ、実にコンダンニャは悟った。ああ、実にコンダンニャは悟った」と。

このようにしてコンダンニャ尊者はアンニヤー・コンダンニャ（悟ったコンダンニャ）と呼ばれるようになった。

そのとき真理（法）を見、真理（法）を得、真理（法）を知り、真理（法）に通達し、惑いを越え、疑いを離れ、なにものも恐れない確信を得、他の師に依存する必要のなくなったアンニヤー・コンダンニャは「世尊のもとで出家しようございます。受戒しようございます」といった。

「来なさい、比丘よ。法はよく説かれている。清浄行を行じなさい。正しく苦を終滅させるために」と、世尊はいわれた。これがかの尊者の受戒であった。

（比丘達の悟り）

それから世尊は残りの比丘達に真理の教えを説き、教えた。そして、世尊より真理の教えが説かれ、教えられているとき、ヴァッパ尊者とバッディヤ尊者にも塵を離れ、汚れを離れた法の眼が生じた。

「およそ生じるものはすべて、それは消滅するものである」と。

そのとき、真理（法）を見、真理（法）を得、真理（法）を知り、真理（法）に通達し、惑いを越え、疑いを離れ、なにものも恐れない確信を得、他の師に依存する必要のなくなったかれらは、「世尊のもとで出家しようございます。受戒しようございます」といった。「来なさい、比丘達よ。法はよく説かれている。清浄行を行じなさい。正しく苦を終滅させるために」と、世尊はいわれた。これがかの尊者達の受戒であった。

それから世尊は残りの托鉢にでていた比丘達に真理の教えを説き、教えた。そのとき、ほかの三人の比丘達は托鉢に出かけ、それで食物を得、それによって六人の修行者達は生活した。

そしてマハーナーマ尊者とアッサジ尊者にも、世尊より真理の教えが説かれ、教えられているとき、塵を離れ、汚れを離れ、法の眼が生じた。

「およそ生じるものはいかなるものも、すべてそれは消滅するものである」と。

そのとき、真理（法）を見、真理（法）を得、真理（法）を知り、真理（法）に通達し、惑いを越え、疑いを離れ、なにものも恐れない確信を得、他の師に依存する必要のなくなったかれらは「世尊のもとで出家しようございます。受戒しようございます」といった。「来なさい、比丘達よ。法はよく説かれている。清浄行を行じなさい。正しく苦を終滅させるために」と、世尊はいわれた。

これがかの尊者達の受戒であった。

## 《無我の教え》

(さらに) 世尊は五人の比丘達に語りかけた。

色<sup>しき</sup> (物質的<sup>が</sup>身体のこと) は自分 (我) ではない。もし色<sup>が</sup>が自分であったのなら、この色は病いにはならないであろう。色にたいして「このようになれ」とか「このようになるな」とかなし得るであろう。ところが、色<sup>が</sup>が自分ではないから、この色は病気にもなり、また色にたいして「このようになれ」とか「このようになるな」とかなし得ないのである。

受<sup>じゆ</sup> (苦<sup>く</sup>、楽<sup>らく</sup>、不苦不楽<sup>ふくふらく</sup>の感覚 [五感：感じる] 作用のこと) は自分 (我) ではない。もし受<sup>が</sup>が自分であったのなら、この受は病いにはならないであろう。受にたいして「このようになれ」とか「このようになるな」とかなし得るであろう。ところが、受<sup>が</sup>が自分ではないから、この受は病気にもなり、また受にたいして「このようになれ」とか「このようになるな」とかなし得ないのである。

想<sup>そう</sup> (概念 [想い・考え] のこと) は自分 (我) ではない。もし想<sup>が</sup>が自分であったのなら、この想は病いにはならないであろう。想到たいして「このようになれ」とか「このようになるな」とかなし得るであろう。ところが、想<sup>が</sup>が自分ではないから、この想は病気にもなり、また想到たいして「このようになれ」とか「このようになるな」とかなし得ないのである。

行<sup>ぎよう</sup> (意志作用、感情のこと) は自分 (我) ではない。もし行<sup>が</sup>が自分であったのなら、この行は病いにはならないであろう。行にたいして「このようになれ」とか「このようになるな」とかなし得るであろう。ところが、行<sup>が</sup>が自分ではないから、この行は病気にもなり、また行にたいして「このようになれ」とか「このようになるな」とかなし得ないのである。

識<sup>しき</sup> (認識作用、意識のこと) は自分 (我) ではない。もし識<sup>が</sup>が自分であったのなら、この識は病いにはならないであろう。識にたいして「このようになれ」とか「このようになるな」とかなし得るであろう。ところが識<sup>が</sup>が自分ではないから、この識は病気にもなり、また識にたいして「このようになれ」とか「このようになるな」とかなし得ないのである。

「さていかに思うであろうか。色<sup>しき</sup>は常であろうかそれとも無<sup>む</sup>常<sup>じよう</sup>であろうか。」

「無常です。師よ。」

「では無常なるものは苦<sup>く</sup>であろうか、それとも楽<sup>らく</sup>であろうか。」

「苦<sup>く</sup>です。師よ。」

「では無常であり、苦<sup>く</sup>であり、変<sup>へん</sup>転<sup>てん</sup>する存在にたいして”それはわたしのものです”とか”それはわたしです”とか”それはわたしの我 (魂) である”とか見なすことは適切なことであろうか。」

「いいえ、適切ではありません。師よ。」

「さていかに思うであろうか。受<sup>じゅ</sup>は常であろうかそれとも無常であろうか。」

「無常です。師よ。」

「では無常なるものは苦であろうか、それとも楽であろうか。」

「苦です。師よ。」

「では無常であり、苦であり、変転する存在にたいして”それはわたしのものです”とか”それはわたしです”とか”それはわたしの我（魂）である”とか見なすことは適切なことであろうか。」

「いいえ、適切ではありません。師よ。」

「さていかに思うであろうか。想<sup>そう</sup>は常であろうかそれとも無常であろうか。」

「無常です。師よ。」

「では無常なるものは苦であろうか、それとも楽であろうか。」

「苦です。師よ。」

「では無常であり、苦であり、変転する存在にたいして”それはわたしのものです”とか”それはわたしです”とか”それはわたしの我（魂）である”とか見なすことは適切なことであろうか。」

「いいえ、適切ではありません。師よ。」

「さていかに思うであろうか。行<sup>ぎょう</sup>は常であろうかそれとも無常であろうか。」

「無常です。師よ。」

「では無常なるものは苦であろうか、それとも楽であろうか。」

「苦です。師よ。」

「では無常であり、苦であり、変転する存在にたいして”それはわたしのものです”とか”それはわたしです”とか”それはわたしの我（魂）である”とか見なすことは適切なことであろうか。」

「いいえ、適切ではありません。師よ。」

「さていかに思うであろうか。識<sup>しき</sup>は常であろうかそれとも無常であろうか。」

「無常です。師よ。」

「では無常なるものは苦であろうか、それとも楽であろうか。」

「苦です。師よ。」

「では無常であり、苦であり、変転する存在にたいして”それはわたしのものです”とか”それはわたしです”とか”それはわたしの我（魂）である”とか見なすことは適切なことであろうか。」

「いいえ、適切ではありません。師よ。」

それゆえ比丘達よ、いかなる色（身体）についても、過去のもであろうと、未来のもであろうと、現在のもであろうと、内のもであろうと外のもであろうと、粗大<sup>そだい</sup>なものであると微細なものであると、劣<sup>おと</sup>ったものであると優<sup>よし</sup>れたものであると、遠くのもであろうと近くのもであろうとも、すべての色（身体）にたいして”これはわたしのものではない” ”これはわたしではない” ”これはわたしの我ではない”と、

このようにあるがままに正しい智慧を持って見るべきです。

いかなる受（感覚）についても、過去のものであろうと、未来のものであろうと、現在のものでもあろうと、内のものでもあろうと外のものでもあろうと、粗大なものであろうと微細なものであろうと、劣ったものであろうと優れたものであろうと、遠くものであろうと近くのものであろうとも、すべての受（感覚）にたいして”これはわたしのものではない” ”これはわたしではない” ”これはわたしの我ではない”と、このようにあるがままに正しい智慧を持って見るべきです。

いかなる想（概念）についても、過去のものであろうと、未来のものであろうと、現在のものでもあろうと、内のものでもあろうと外のものでもあろうと、粗大なものであろうと微細なものであろうと、劣ったものであろうと優れたものであろうと、遠くものであろうと近くのものであろうとも、すべての想（概念）にたいして”これはわたしのものではない” ”これはわたしではない” ”これはわたしの我ではない”と、このようにあるがままに正しい智慧を持って見るべきです。

いかなる行（意志）についても、過去のものであろうと、未来のものであろうと、現在のものでもあろうと、内のものでもあろうと外のものでもあろうと、粗大なものであろうと微細なものであろうと、劣ったものであろうと優れたものであろうと、遠くものであろうと近くのものであろうとも、すべての行（意志）にたいして”これはわたしのものではない” ”これはわたしではない” ”これはわたしの我ではない”と、このようにあるがままに正しい智慧を持って見るべきです。

いかなる識（意識）についても、過去のものであろうと、未来のものであろうと、現在のものでもあろうと、内のものでもあろうと外のものでもあろうと、粗大なものであろうと微細なものであろうと、劣ったものであろうと優れたものであろうと、遠くものであろうと近くのものであろうとも、すべての識（意識）にたいして”これはわたしのものではない” ”これはわたしではない” ”これはわたしの我ではない”と、このようにあるがままに正しい智慧を持って見るべきです。

このように見ている、教えをよく学んでいる聖なる弟子達は、色を厭<sup>いと</sup>い、受を厭<sup>いと</sup>い、想を厭<sup>いと</sup>い、行を厭<sup>いと</sup>い、識を厭<sup>いと</sup>います。厭<sup>いと</sup>っているとき、欲から離れます。欲から離れることによって解脱<sup>げだつ</sup>します。解脱<sup>げだつ</sup>したとき、「解脱<sup>な</sup>したのだ」という知識が生まれます。「生れることは滅びた。清浄行は完成した。為すべきことは為しおえた。再び、この世にもどってくることはない。」と知るのです。

#### 《五妙欲》

また比丘達よ、五つの妙<sup>みょうよく</sup>欲というものがあります。その五つとは何であるか。

①眼で知られる色<sup>いろ</sup>（色、形あるもの）という、求められ、欲せられ、愛でられ、愛着せられ、欲をとめない、人を汚すものがあります。

②耳で知られる音<sup>おと</sup>という、求められ、欲せられ、愛でられ、愛着せられ、欲をともない、人を汚すものがあります。

③鼻で知られる匂<sup>にお</sup>いという、求められ、欲せられ、愛でられ、愛着せられ、欲をともない、人を汚すものがあります。

④舌で知られる味<sup>あじ</sup>という、求められ、欲せられ、愛でられ、愛着せられ、欲をともない、人を汚すものがあります。

⑤身体で知られる感<sup>かん</sup>触<sup>しよく</sup>という、求められ、欲せられ、愛でられ、愛着せられ、欲をともない、人を汚すものがあります。

これらが、比丘達よ、五つの妙<sup>みょうよく</sup>欲です。

いかなる修行者であれ、バラモンであろうとも、これらの五つの妙<sup>みょうよく</sup>欲<sup>しば</sup>に縛られ、熱中し、狂い、不利益を見ず、真の避難場所を知らずしてこれらを享<sup>きやう</sup>受<sup>じゆ</sup>するものは、このようなもので知られるべきです。

”不運に陥<sup>おちい</sup>ったもの、災難に陥ったもの、悪魔のなすがままにされるものである”と。

たとえば、比丘達よ、罾<sup>わな</sup>のたくさん仕掛けられた林に、鹿が罾に捕らえられ、横たわっていると。かの鹿は、このようなものであると知られるべきある。

”不運に陥ったもの。災難に陥ったもの。獵師のなすがままにされるもの、獵師がやってきても、好きなどころに逃げ出せないもの”であると。

このように、いかなる修行者であれ、バラモンであろうとも、これらの五つの妙欲に縛られ、熱中し、狂い、不利益を見ず、真の避難場所を知らずしてこれらを享受するもの、かれらはこのようなものであると知られるべきです。

”不運に陥ったもの、災難に陥ったもの、悪魔のなすがままにされるものである”と。

一方、いかなる修行者であれ、バラモンであろうとも、これらの五つの妙欲に縛られず、熱中せず、狂わず、不利益を見、真の避難場所を知り、これらを享受するもの、かれらはこのようなものであると知られるべきです。

”不運に陥っていないもの、災難に陥っていないもの、悪魔のなすがままにならないものである”と。

たとえば、比丘達よ、罾<sup>わな</sup>のたくさん仕掛けられた林に、鹿が罾に捕らえられることなく横たわっているとしよう。かの鹿はこのようなものであると知られるべきある。

”不運に陥っていないもの。災難に陥っていないもの。獵師のなすがままにならないもの、獵師がやってきたとき、好きなどころに逃げ出せるもの”であると。

このように、いかなる修行者であれ、バラモンであろうとも、これらの五つの妙欲に縛られず、熱中せず、狂わず、不利益を見、真の避難場所を知り、これらを享受するもの、かれらはこのようなものであると知られるべきです。

”不運に陥っていないもの、災難に陥っていないもの、悪魔のなすがままにならないものである”と。

たとえば、比丘達よ、山<sup>さんぶく</sup>腹の林にいる鹿は、林の中で安心して歩み、安心して立ち、安心して座り、安心して眠るであろう。それはどうしてであろうか？ 獵師達の至り得ないところにいるからである。このように、比丘達よ、欲を離れ、悪を離れ、まだ思考作用は残っているものの、欲から離れたことより生れる、喜びと、安楽のある最初の禪定の世界（色界<sup>さんがい</sup>〔三界の二番目：精妙な物質の世界〕の第一番目：梵天の世界）に行くのである。

これを、比丘達よ、”悪魔を盲目にし、悪魔の眼をあとかたもなく破壊して、悪魔の眼のとどかない処へ行った。”というのです。

またつぎに、比丘達よ、思考作用がおさまったことによる、内側が静まった心の統一状態。思考作用も考察作用もなくなり、三昧より生じる喜びと楽のある二番目の禪定の世界（色界の第二番目の世界）にいきます。

これを、比丘達よ、”悪魔を盲目にし、悪魔の眼をあとかたもなく破壊して、悪魔の眼のとどかない処へ行った。”というのです。

またつぎに比丘達よ、喜びにたいして欲が離れ、平静（無関心：捨<sup>しゃ</sup>）にして正<sup>しょう</sup>念<sup>ねん</sup>（常に気付いている）正<sup>しょう</sup>知<sup>ち</sup>（常に知っている＝正念）のある、身体には楽（悦楽）を感じ、聖者達が平静（無関心）にして念のある安楽な境地」と呼ぶ、三番目の禪定の世界（色界の第三番目の世界）に行きます。

これを、比丘達よ、”悪魔を盲目にし、悪魔の眼をあとかたもなく破壊して、悪魔の眼のとどかない処へ行った。”というのです。

またつぎに比丘達よ、楽も捨てられ、苦しみも捨てられ、以前、すでに快も不快も消滅している。苦でもなく楽でもない、平静（無関心）と念とが完全に清浄となった四番目の禪定の世界（色界の第四番目の世界）に行きます。

これを、比丘達よ、”悪魔を盲目にし、悪魔の眼をあとかたもなく破壊して、悪魔の眼のとどかない処へ行った。”というのです。

またつぎに比丘達よ、すべての物質的想いを越え、（物質的）抵抗のある想いは消滅し、種々の想いを心に起こさない、無限の空間のある、空無辺<sup>くうむへん</sup>処<sup>しよ</sup>（無色界〔三界の三番目；物質的要素のなくなった、ただ心のみによる世界〕の第一番目の世界）という禪定の世界に行きます。

これを、比丘達よ、”悪魔を盲目にし、悪魔の眼をあとかたもなく破壊して、悪魔の眼のとどかない処へ行った。”というのです。

またつぎに比丘達よ、すべての空無辺<sup>くうむへん</sup>所<sup>しよ</sup>を越え、無限の意識のある、識無辺<sup>しきむへん</sup>処<sup>しよ</sup>（無色界の第二番目の世界）という禪定の世界に行きます。

これを、比丘達よ、”悪魔を盲目にし、悪魔の眼をあとかたもなく破壊して、悪魔の眼のとどかない処へ行った。”というのです。



またつぎに比丘達よ、すべての識無辺所を越え、なにもものもないという、無所有処（無色界の第三番目の世界：アーラーラ・カーラマ仙人の教えた世界）という禪定の世界に行きます。

これを、比丘達よ、” 悪魔を盲目にし、悪魔の眼をあとかたもなく破壊して、悪魔の眼のとどかない処へ行った。” というのです。

またつぎに比丘達よ、すべての無所有処を越え、非想非非想処（無色界の第四番目の世界：ウッタカ・ラーマプッタ仙人の教えた世界）という禪定の世界に行きます。

これを、比丘達よ、” 悪魔を盲目にし、悪魔の眼をあとかたもなく破壊して、悪魔の眼のとどかない処へ行った。” というのです。

またつぎに比丘達よ、すべての非想非非想処を越えると、想いと感覚が止滅します（想受滅定）。そして智慧によりこれを見て、すべての汚れ（漏）を消滅させます。

これを、比丘達よ、” 悪魔を盲目にし、悪魔の眼をあとかたもなく破壊して、悪魔の眼のとどかない処へ行き、一切の世間の執着を渡った。” というのです。

このようにしてかれは、安心して歩み、安心して立ち、安心して座り、安心して眠るのである。それはなぜであるか？ 悪魔の至り得ぬところへ行ったからである。

このように世尊は語った。満足した五人の比丘は世尊の言葉を喜んだ。この説明がなされたとき、五人の比丘達からはいかなる執着もなくなり、汚れより心は解脱した。

付 録      ろくじんづう      しやもんか  
《六神通》      (長部經典2『沙門果經』より)]

～

(身体の観察)

また次に、大王(阿闍世王)よ、かの比丘はこのように統一され、清浄となり、輝き、痘痕なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、知識と直観(知見)へと心を注ぎ、傾けます。(そのとき)このように知ります。

「このわたしの体は形体を備え、四大(地、水、火、風)より成り、父母より生れ、粥飯の集まったもの、無常に覆われ、踏みにじられ、破壊され、分解するものである。しかし、このわたしの識(意識)はここに依存し、ここに縛られている」と。

大王よ、たとえば美しく輝く八角のよく磨かれた、澄んだ、清浄で濁りのない、あらゆる点で申し分のない宝石が、青色、黄色、赤色、白色、あるいは橙色の糸で通されていたとする。これを目利き(の宝石商)が手にとり、観察します。

「これは美しく輝く八角のよく磨かれた、澄んだ、清浄で濁りのない、あらゆる点で申し分のない宝石が、青色、黄色、赤色、白色、あるいは橙色の糸で通されている」と。

このように大王よ、かの比丘はこのように統一され、清浄となり、輝き、痘痕なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、知識と直観(知見)へと心を注ぎ、傾けます。そしてこのように知ります。

「このわたしの体は形体を備え、四大(地、水、火、風)より成り、父母より生れ、粥飯の集まったもの、無常に覆われ、踏みにじられ、破壊され、分解するものである。しかし、このわたしの識(意識)はここに依存し、ここに縛られている」と。

これもまた大王よ、前に述べた果報よりもさらに優れて、殊勝なる、目に見える修行者の果報です。

(意成身)

かれはまた、このように統一され、清浄となり、輝き、痘痕なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、意成身(原意：心より成る体 the body made of mind)を化作するために心を注ぎ、傾けます。かれはこの(自らの)身体から、形体を備え、心より成り、四肢および感覚器官(根：【原語】indriya 力あるものの意)すべてがそろった別の身体を化作します。

(注：仏教において真の感覚器官とはこの根で、体にある眼、耳、鼻、舌、身(皮膚)は扶塵根(根を扶けるもの)とよばれ、感覚器官そのものとは考えられていない。)

大王よ、たとえば葦の茎をその袴から引き抜きます。そのとき、かれは「これは茎でこれは袴。茎は袴から引き抜かれ、二つは別々のものとなった」と、このように知ります。

大王よ、たとえば男が剣を鞘から引きぬくとしします。そのときかれはこう思います。「これは剣で、これは鞘。鞘から剣は引きぬかれ、二つは別々のものとなった」と。

大王よ、たとえば男がへびを脱け殻から引き出すとします。そのときかれはこう思います。「これはへびで、これは脱け殻。へびは脱け殻から引き出され、二つは別々のものとなった」と。

このように大王よ、かの比丘はこのように統一され、清浄となり、輝き、痘痕なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、意成身を化作するために心を注ぎ、傾けます。かれはこの（自らの）身体から、形体を備え、心より作られ、四肢およびすべての感覚器官がそろった別の身体を化作します。

これもまた大王よ、前に述べた果報よりもさらに優れて、殊勝なる、目に見える修行者の果報です。

## 《六神通》

### （１－神足通）

かれはまた、このように統一され、清浄となり、輝き、痘痕なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、神足通（身体的な超能力）へと心を注ぎ、傾けます。（そのとき）かれは種種さまざまな神足を体験します。

一から多となり、多から一となり、あるいは姿を現し、あるいは姿を隠し、壁を越え、垣を越え、山を越え、虚空のように何ものにも障えざれることなく行きます。水中のように地面に沈み、地面に現れます。地上のように水上を沈むことなく行き、鳥のように虚空を、足を組んだまま進みます。かくも偉大なる神力、かくも偉大なる威光を放つ月や太陽を手でさわり、手で撫で、梵天界に至るまで身体による力を揮います。

大王よ、たとえば熟練した陶工、あるいはその弟子が、よく練った泥から望むとおりの器を作り上げるように、あるいは大王よ、熟練した象牙細工師かその弟子が、よく準備された象牙から望むとおりの象牙細工を作り出すように、あるいはまた大王よ、熟練した金細工師かその弟子が、よく準備された金から望むとおりの金細工を作り出すように、そのように大王よ、かの比丘はこのように統一され、清浄となり、輝き、痘痕なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、神足通（身体的な超能力）へと心を注ぎ、傾けます。（そのとき）かれは種種さまざまな神足を体験します。一から多となり、多から一となり、あるいは姿を現し、あるいは姿を隠し、壁を越え、垣を越え、山を越え、虚空のように何ものにも障えざれることなく行きます。水中のように地面に沈み、地面に現れます。地上のように水上を沈むことなく行き、鳥のように虚空を、足を組んだまま進みます。かくも偉大なる神力、かくも偉大なる威光を放つ月や太陽を手でさわり、手で撫で、梵天界に至るまで身体による力を揮います。

これもまた大王よ、前に述べた果報よりもさらに優れて、殊勝なる、目に見える修行者の果報です。

### （２－天耳通）

かれはまた、このように統一され、清浄となり、輝き、痘痕<sup>きず</sup>なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、天の耳（天耳通<sup>てんにつう</sup>）へと心を注ぎ、傾けます。（そのとき）かれは清浄な、人間を超えた天の耳で、天（神々）と人間の声、遠くの音、近くの音を聞きます。

大王よ、たとえば男が道を歩いているときに、大太鼓<sup>おおだいこ</sup>の音、小太鼓<sup>こだいこ</sup>の音、ホラ貝、シンバル、銅鑼<sup>どら</sup>の音を聞くとする。そのときこうのように思うであろう。「これは大太鼓の音である。これは小太鼓の音である。これはホラ貝、シンバル、銅鑼の音である」と。

このように大王よ、かの比丘はこのように統一され、清浄となり、輝き、痘痕<sup>きず</sup>なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、天の耳（天耳通<sup>てんにつう</sup>）へと心を注ぎ、傾けます。かれは清浄な、人間を超えた天の耳で、天（神々）と人間の声、遠くの音、近くの音を聞きます。

これもまた大王よ、前に述べた果報よりもさらに優れて、殊勝なる、目に見える修行者の果報です。

### （３－他心通）

かれはまた、このように統一され、清浄となり、輝き、痘痕<sup>きず</sup>なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、（他者の）心を洞察する知（他心通<sup>たしんつう</sup>）へと心を注ぎ、傾けます。（そのとき）かれは他の生きもの、他の人々の心によって、（かれらの）心について知ります。欲のある心は欲のある心であると知ります。欲のない心は欲のない心であると知ります。怒りのある心は怒りのある心であると知ります。怒りのない心は怒りのない心であると知ります。愚かさのある心は愚かさのある心であると知ります。愚かさのない心は愚かさのない心であると知ります。縮んだ心は縮んだ心であると知ります。散乱した心は散乱した心であると知ります。寛大な心は寛大な心であると知ります。狭い心は狭い心であると知ります。平凡な心は平凡な心であると知ります。無上（最高）の心は無上（最高）の心であると知ります。（精神）統一した心は（精神）統一した心であると知ります。（精神）統一していない心は（精神）統一していない心であると知ります。解脱した心は解脱した心であると知ります。解脱していない心は解脱していない心であると知ります。

大王よ、たとえば女であれ男であれ、少年であれ若者であれ、おしゃれ好きのものが、曇りのないきれいな鏡か、澄んだ井戸の水に自分の顔を映して観察するとき、ほくろがあるならばほくろがあると知り、ほくろがないならばほくろがないと知るように、そのように大王よ、かの比丘は、このように統一され、清浄となり、輝き、痘痕<sup>きず</sup>なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、（他者の）心を洞察する知（他心通<sup>たしんつう</sup>）へと心を注ぎ、傾けます。かれは他の生きもの、他の人々の心によって、（かれらの）心について知ります。欲のある心は欲のある心であると知ります。欲のない心は

欲のない心であると知ります。怒りのある心は怒りのある心であると知ります。怒りのない心は怒りのない心であると知ります。愚かさのある心は愚かさのある心であると知ります。愚かさのない心は愚かさのない心であると知ります。縮んだ心は縮んだ心であると知ります。散乱した心は散乱した心であると知ります。寛大な心は寛大な心であると知ります。狭い心は狭い心であると知ります。平凡な心は平凡な心であると知ります。無上（最高）の心は無上（最高）の心であると知ります。（精神）統一した心は（精神）統一した心であると知ります。（精神）統一していない心は（精神）統一していない心であると知ります。解脱した心は解脱した心であると知ります。解脱していない心は解脱していない心であると知ります。

これもまた大王よ、前に述べた果報よりもさらに優れて、殊勝なる、目に見える修行者の果報です。

#### （４－宿明通）

かれは、このように統一され、清浄となり、輝き、痘痕<sup>きず</sup>なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、以前の生活を思いだす知識（宿明通）へと心を注ぎ、傾けます。

（そのとき）無数の様々な以前の生活を思いだします。たとえば一つの人生、二つの人生、三つの人生、四つの人生、五つの人生、十の人生、二十の人生、三十の人生、四十の人生、五十の人生、百の人生、千の人生、一万の人生、無数の成<sup>じょうこう</sup> 劫<sup>しょうろうびょうし</sup>（人間の生老病死と同様に宇宙にも成<sup>じょう</sup>、住<sup>じゅう</sup>、壊<sup>え</sup>、空<sup>くう</sup>の四つの時期<sup>こう</sup>（劫：（原語）カルパ）がある）、無数の壊<sup>え</sup>劫<sup>こう</sup>、無数の成<sup>じょう</sup> 壊<sup>え</sup>劫<sup>こう</sup>を思いだします。

「ここにいた。このような名前。このような姓。このような皮膚の色。このような食べ物。このような苦しみ、このような楽。何歳で死に、そしてここを去り、あそこに生れ、あそこにいた。このような名前。このような姓。このような皮膚の色。このような食べ物。このような苦しみ、楽を受けた。何歳で死に、そしてここを去り、今ここに生まれた」と。

このように（視覚的）特徴と詳細を伴った、無数の様々な以前の生活を思いだします。

たとえば大王よ、ある男が自分の村から別の村に行くとする。その村からまた別の村へ行き、そしてその村からまた自分の村へ帰ってくるとする。彼はこのように思うであろう。

「わたしは自分の村からこの村へ行行った。そこでこのように立ち、このように座り、このような話をし、また黙っていた。またこの村からやって来て、あの村で、このように立ち、このように座り、このような話をし、また黙っていた。そして、その村からまた自分の村に帰ってきたのだ」と。

このように大王よ、かの比丘はこのように統一され、清浄となり、輝き、痘痕<sup>きず</sup>なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、以前の生活を思いだす知識（宿明通）へと心を注ぎ、傾けます。

(そのとき) 無数の様々な以前の生活を思い出します。たとえば一つの人生、二つの人生、三つの人生、四つの人生、五つの人生、十の人生、二十の人生、三十の人生、四十の人生、五十の人生、百の人生、千の人生、一万の人生、無数の成 劫 (人間の生 老 病 死 と同様に宇宙にも 成、住、壊、空の四つの時期 (劫: (原語) カルパ) がある)、無数の壊劫、無数の成 壊 劫を思い出します。

「ここにいた。このような名前。このような姓。このような皮膚の色。このような食べ物。このような苦しみ、このような楽。何歳で死に、そしてここを去り、あそこに生れ、あそこにいた。このような名前。このような姓。このような皮膚の色。このような食べ物。このような苦しみ、楽を受けた。何歳で死に、そしてここを去り、今ここに生まれた」と。

このように (視覚的) 特徴と詳細をともなった、無数の様々な以前の生活を思い出します。

これもまた大王よ、前に述べた果報よりもさらに優れて、殊勝なる、目に見える修行者の果報です。

#### (5 - 天眼通)

かれはまた、このように統一され、清浄となり、輝き、痘痕なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、もろもろの生きものの死と誕生を知る知識 (天眼通) へと心を注ぎ、傾けます。(そのとき) 清浄な人間を越えた天眼で生きものたちを見ます。死につつある者。生まれつつある者。劣った者。優れた者。性質のよい者。性質の悪い者。順調な者。障害の多い者。

また自らの行いに応じて進んでいく生きものを見ます。「ああ、これらの生きものたちは、身による悪い行いによる業 (身悪業) をとまなっている。言葉による悪い行いによる業 (口悪業) をとまなっている。心による悪い行いによる業 (意悪業) をとまなっている。聖なるものに対して悪くいった人。間違った考え方を持った人。間違った考えをし、さらに行いもした人。彼らは身が敗れてのち、あの世に赴いて、惨く、酷く、落ちていく、地獄に生れる。」「ああ、これらの生きものたちは身による善い行いによる業 (身善業) をとまなっている。言葉による善い行いによる業 (口善業) をとまなっている。心による善い行いによる業 (意善業) をとまなっている。聖なるものを悪くいわなかった人。正しい考え方 (正見) を持った人。正しい考えと行いを共にした人。彼らは身が敗れてのち、善いところ、神々の世界 (天国) に生れる」と。

このように清浄な人間を越えた天眼で生きものたちを見ます。死につつある者。生まれつつある者。劣った者。優れた者。性質のよい者。性質の悪い者。順調な者。障害の多い者。また自らの行いに応じて進んでいく生きものを見ます。

たとえば大王よ、四つ辻の真ん中に大きな家が建っているとしよう。(その二階から) 眼のいい人が立って、人々が家の中に入出入りするのを、あるいは車で通りを行き来するのを、あるいは四つ辻の真ん中で座っているのを見るであろう。そのときこのように思うであろう。「ある人々は家の中に入っていく。ある人々はある人々は車に乗っている。ある人々は四つ辻の真ん中で座っている」と。

このように大王よ、かの比丘はこのように統一され、清浄となり、輝き、痘痕なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、もろもろの生きものの死と誕生を知る知識（天眼通）へと心を注ぎ、傾けます。

（そのとき）清浄な人間を越えた天眼で生きものたちを見ます。死につつある者。生まれつつある者。劣った者。優れた者。性質のよい者。性質の悪い者。順調な者。障害の多い者。

また自らの行いに応じて進んでいく生きものを見ます。「ああ、これらの生きものたちは、身による悪い行いによる業（身悪業）をともなっている。言葉による悪い行いによる業（口悪業）をともなっている。心による悪い行いによる業（意悪業）をともなっている。聖なるものに対して悪くいった人。間違った考え方を持った人。間違った考えをし、さらに行いもした人。彼らは身が敗れてのち、あの世に赴いて、惨く、酷く、落ちていく、地獄に生れる。」

「ああ、これらの生きものたちは身による善い行いによる業（身善業）をともなっている。言葉による善い行いによる業（口善業）をともなっている。心による善い行いによる業（意善業）をともなっている。聖なるものを悪くいわなかった人。正しい考え方（正見）を持った人。正しい考えと行いを共にした人。彼らは身が敗れてのち、善いところ、神々の世界（天国）に生れる。」

このように清浄な人間を越えた天眼で生きものたちを見ます。死につつある者。生まれつつある者。劣った者。優れた者。性質のよい者。性質の悪い者。順調な者。障害の多い者。また自らの行いに応じて進んでいく生きものを見ます。

これもまた大王よ、前に述べた果報よりもさらに優れて、殊勝なる、目に見える修行者の果報です。

#### （6－漏尽通一悟り）

かれはまた、このように統一され、清浄となり、輝き、痘痕なく、汚れを離れ、柔和となり、準備が調い、確立し、不動を得た心において、汚れ（原意：漏れ出すもの、漏）の滅尽（漏尽通）へと心を注ぎ、傾けます。

（そのとき）「これは苦である」とありのままに知ります（如实知）。「これは苦の生起（原因）である」とありのままに知ります。「これは苦の止滅である」とありのままに知ります。「これは苦の止滅に至る道である」とありのままに知ります。「これは汚れである」とありのままに知ります。「これは汚れの生起（原因）である」とありのままに知ります。「これは汚れの止滅である」とありのままに知ります。「これは汚れの止滅に至る道である」とありのままに知ります。

このように知り、このように見ているとき、欲の汚れ（欲漏）から心は解脱します。存在の汚れ（有漏）から心が解脱します。無明の汚れ（無明漏）から心が解脱します。解脱したとき、「解脱したのだ」という知識が生じます。「生れることは尽き、清浄行は完成した。為すべきことは為しおえた。再びこの世界にもどってくることはない。」と覚ります。

たとえば大王よ、山<sup>やま</sup>間<sup>あい</sup>に澄んだ、清浄な、濁りのない湖があるとしよう。そこに眼のいい男<sup>きし</sup>が岸<sup>かた</sup>に立って、貝<sup>から</sup>の殻<sup>がら</sup>や、砂利<sup>じゃり</sup>や小石、また魚の群れが動いたり止まったりするのを見るとしよう。そのとき彼はこのように思うであろう。

「ここは澄んだ、清浄な、濁りのない湖である。そこに貝の殻があり、砂利や小石があり、また魚の群れがあり、動いたり止まったりしている」と。

このように大王よ、かの比丘はこのように統一され、清浄となり、輝き<sup>きず</sup>、痘痕なく、汚れを離れ、柔和となり、準備<sup>ろじんつう</sup>が調い、確立し、不動を得た心において、汚れ（原意：漏れ出すもの、漏）の滅尽（漏尽通）へと心を注ぎ、傾けます。

（そのとき）「これは苦である」とありのままに知ります（如実知）。「これは苦の生起（原因）である」とありのままに知ります。「これは苦の止滅である」とありのままに知ります。「これは苦の止滅に至る道である」とありのままに知ります。「これは汚れである」とありのままに知ります。「これは汚れの生起（原因）である」とありのままに知ります。「これは汚れの止滅である」とありのままに知ります。「これは汚れの止滅に至る道である」とありのままに知ります。

このように知り、このように見ているとき、欲の汚れ<sup>よくろ</sup>（欲漏）から心は解脱します。存在<sup>う</sup>の汚れ<sup>ろ</sup>（有漏）から心が解脱します。無明<sup>むみょうろ</sup>の汚れ（無明漏）から心が解脱します。解脱したとき、「解脱したのだ」という知識が生じます。「生れることは尽き、清<sup>しょう</sup> 浄<sup>じょう</sup> 行<sup>ぎょう</sup>は完成した。為すべきことは為しおえた。再びこの世界にもどってくることはない。」と覚ります。

これもまた大王よ、前に述べた果報よりもさらに優れて、殊勝なる、目に見える修行者の果報です。しかし大王よ、この果報より他の、さらに優れて、殊勝なる、眼に見える修行者の果報はないのです。